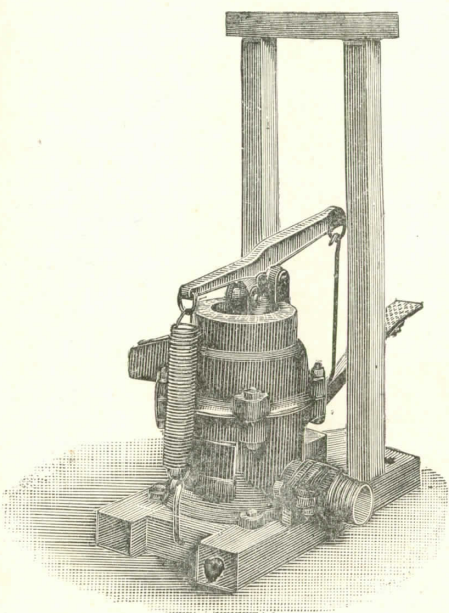


日韓
專賣特許松田式ポンプとその聲望

假令淨瑠璃に巢林子を知らざる者ありとも
揚水機に松田式ポンプを聯想せざるはなし



幾多の揚水機中嶄新にして奇拔、最輕便にして最經濟なるは我が松田式ポンプなり、構造簡單、運轉輕快、揚水多量、炊事、灌漑、排水、土木、鑛山等適せざる處なく手押、足踏動力掛等御好みに應ず
上圖足踏裝置にして灌漑に適す今や全國の農業界に貢獻しつゝある利益は幾何ぞ(代價表進呈)

大阪市北區中之島四丁目濱三十一番地

一手販賣元 乾 商店

電話長西六二七番

近松會雜誌第一號要目

口 繪

雪緣齋贊のろま人形繪(雲錦隨筆所載)(木版)

片岡仁左衛門丈風三右衛門丈扮裝夕霧伊左衛門(寫真版)

本會記事

會員名簿……………(一)

論 說

近松會雜誌の發刊に際し近松を論じ藝林の

諸子に及ぶ(承前)……………(五)緒方 相山

講 筵

忠兵衛 梅 川冥途の飛脚(つどき)……………(九)青瑠 璃 漢

傳 記

六代目染太夫自傳(つどき)……………(四)竹本 叶太夫

雜 錄

根引の門松について……………(三)荷葉 女史

掛こさばの研究(一)……………(三)小野 利教

巢林子の遺墨……………(七)因果庵主人

瑠璃の宵(つどき)……………(四)ていくわ

藝 評

空也念佛堂三昧線會……………(四)中村 吟翠

歌々評……………(四七)田 の 字

女義太夫評判記……………(四八)色 眼 鏡

古今文苑

松の落葉(一)……………(五三)近松門左衛門

詩康熙皇常●同太田北山●狂歌眞顔飯盛●狂詩●小笠原古潭

●竹本叶太夫●和歌小野利教其他

●道行風の妹脊筋……………(五六)平賀 源内

讀者俱樂部●俳句●川柳●忠臣藏狂句

藝苑時報

●攝津大祿の風懷●田中翁を悼む●ああ、高木善兵衛氏●越路

太夫の一行●其後の紋十郎●公會堂の堀江藝妓淨瑠璃●攝重翁

建碑について●喜睦會●全國各新聞評

會員消息

廣 告

投書案内、狂歌募集、

普通廣告

新ら

家新を

あう

あつて

投中

帝や現秋の

新むきなり

一好

のろま人形



持客の

中村鴈次郎

先般關西地方巡業中到る所盛況の
 光榮を得候も全く各位の御厚情に
 依る所と深く御禮申述候就ては
 此の秋狂言には近松翁傑
 作物相演じ候考へに付き何卒
 御高覧之上御批評に預り度右御願
 申上候 敬白

八月五日

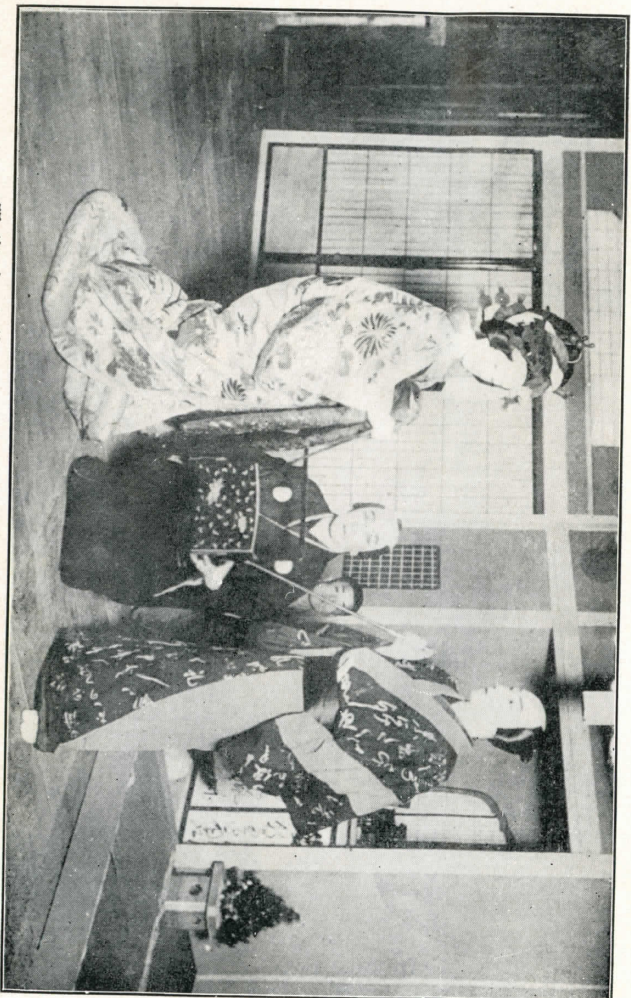
是意左辭ても米でもや
つてやりやぞ、煙草引
寄せ吹く煙管のそらね
體にあたりけり

夕霧つと咽返り

エ、いなさんとも覺え
ぬこの夕霧なまだ傾城
と思ふてか

ほんの女夫じやないか
ぬの……

賊を言はじ今頃は一門
中の狀文にも伊左衛門
内よりと書いても人の
咎めぬ事



門衛右三故

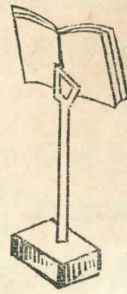
(治園小)

(丈門衛左仁)

近松會雜誌 (第二號)

●本會記事

八月一日 田中市造氏へ令祖父逝去の爲吊詞を贈る。
 八月五日 日本ホテルに於いて、午後五時より評議員會を開き、近松翁墳墓修造の件を議す。
 八月六日 高木善兵衛氏逝去につき同家へ吊詞を贈る。



聲曲類纂所載

發起人 (いろは順)

磯野良吉	緒方正清	加藤喜作	田口謙吉
濱崎健吉	緒方銈次郎	加藤太治郎	竹本攝津大椽
堀内謙吉	岡崎榮次郎	川口音吉	竹本大隅太夫
土居通夫	渡邊庄助	横田孝史	田附政治郎
殿村平右衛門	渡邊修	田中市兵衛	那須善次郎
豊竹呂昇	渡邊眞治	谷新助	長尾善兵衛
千草安兵衛	片岡仁左衛門	高木善兵衛	中村雁次郎

中村秀五郎
梅原龜七
井上德三郎
野口茂平
大谷竹次郎
大谷音吉
太田半笑
八木與三郎

山田留吉
柳廣藏
山内卯之助
松井伊助
古川音吉
寺田市郎平
阿部彦太郎
朝日山四郎右衛門

西園寺龜次郎
木津谷吉兵衛
貴志米吉
湯川玄洋
白井松次郎
島德藏
澁谷正十郎
鹿海文助

芝鶴太郎
芝甚太郎
廣瀨宰平
日比庄兵衛
日比野芳次郎
森下博

會員名簿

○贊助員（いろは順）

石川文右衛門
石橋爲之助
一花一華
伊井蓉峯
石田鐵米
今井正太郎
伊原青々園

今井貫一
伊丹與助
伊勢本貞光
濱村貴鳳
濱村貴若
長谷川如是閑
原田夢龜

濱和助
伴野さかへ
西村天囚
西川滴翠
本多碧波
土井竹次郎
豐澤廣助

豐澤團平
豐澤新左衛門
豐澤猿絲
豐澤廣作
豐澤龍助
鳥居素川
豐澤廣七

豐竹組昇
幣原坦
尾上多見之助
尾上卯三郎
岡野告天子
小野稻洲
尾上喜久太郎

小笠原豐涯
岡花蝶
渡邊霞亭
若林翁
和田天華
脇田小鳥
渡邊又兵衛
和田士光
片岡我童
片岡太郎
金崎杏葉
加藤半紅
梶原綱太郎
上總天香
河合雷鬼
吉田兵吉
吉田霞村
吉田笠雨
竹本越路太夫
竹本染太夫
竹本南部太夫

竹本津太夫
竹本七五三太夫
竹本春子太夫
竹本伊達太夫
竹本大島太夫
竹本長子太夫
竹本錦太夫
竹本叶太夫
竹本熊太郎
田井熊太郎
田村千歲
田中半兵衛
多田喜作
高田蟹堂
高井羊公
田井羊公
武富正道
高橋瓦全
竹本長愛川
竹本長廣
竹本春之助
竹本春子
竹本此助

竹本鳶之助
竹本七五三之助
竹本鶴淺
竹本小仙
竹本東照
竹本林昇
竹本東吉
竹本千代治
竹本團菊
竹本三八
竹本仙春
竹本仙平
竹本春駒
竹本小龍
竹本小千代
竹本仙龍
竹本重豐
竹本重龍
竹本鐵次郎
曾呂利新左衛門
鶴澤清六
辻村秋峯

露谷句水
鶴澤清七
鶴岡茂助
根本吐芳
中川蘆月
中神鹿城
永田好三郎
中村成太郎
中村幹尾
中山光次
鳴海梅松
村井松葉
村井正雄
向井藻浦
上村源之丞
上村重吉
室田八十吉
野澤吉兵衛
野澤吉三郎
野澤吉勝
大森痴雪

奥山榮助
大江素天
熊谷幻華
熊田重人
久保田小塊
黑田金時
山本登糸
山内愚僊
柳川正直
八木柳枝
松本重太郎
牧放浪
松瀨青々
松阪青溪
松本正之助
益田福昇
丸谷硝子
松村大納言
松本金時堂
古内隈川

藤永寅之助
藤井乙男
藤原光治郎
古井古竹
福田福雀
藤山不二
近藤泥牛
小島白潮
後醍院盧山

幸田成友
江上朝霞
嵐璃瑠
嵐璃瑠
赤松林作
饗庭篁村
秋月桂太郎
明石辰玉
齋藤義調

齋藤溪舟
齋藤弔花
菊地三巴
桐竹紋十郎
桐原拾三
木谷傳次郎
喜多村綠郎
北里龍堂
木村且水

行友李風
湯淺月迷
溝江高信
三木三木
水谷不倒
水落露石
滿田熊藏
實川延二郎
清水又右衛門

實川菊次郎
重田定一
島斐太郎
久松定憲
樋口吾笑
森岡騷外
森清司
瀨戸半眠
(以下次號)

○普通會員(いろは順)

飯島貫一
伊藤柳平
伊藤藤柳
石川爲二郎
橋村仁之助
長谷川貴勝
春井彰
西田萬治郎
細見慶吉
鳥居きく子

友松佳雄
中堂興兵衛
中堂種三郎
奧田萬藏
奧田龍水
小田の夫
奧田雪枝
緒方拙齋
渡邊竹之助
紙谷喜雀

吉田桃過僕
吉雄素一
高橋龜太郎
田中正市
橘中熏
竹木唯治
中井利一郎
永藤朝翠
上田君子
白井とき子

山崎常次郎
山田光
山口助六
山本福
前田南勢
足立貫
岩田義玄
水口耕治
宮本卯之楠
宮川楠

三浦久治
小仁庄吉
白井一太郎
鹽田柳
弊原節
盛岡治三郎
關野不二彦
鈴木文雄
(以下次號)

聲曲類纂所載



論説

近松會雜誌の發刊に際し聊か近松を論じ

更に藝林の諸子に及ぶ

(承前)

緒方相山

夫れ此の如く人生の測量を全うしたる彼は、其同情を惹く事の哀感より來るべき者なるをも觀破し、中年以後の作に係る史的戯曲の如きも一面聲譽に對する勢力を向上せしむると共に、哀痛悲痛なる情事を緯入して容易に同情の念を喚起せしめたり。兼好法師物見車、基盤太平記、平家女護の島、信州川中島、天神記、孕常盤、傾城反魂香、雪女五枚羽子板、大磯虎稚物語、傾城吉岡染、吉野都女楠、日本振袖

始等の如き皆然らざるなし。而し其當時に於ける國民の功名心を喚起せしめ支那に迄翻譯せられたりと稱する國姓爺合戦、同後日合戦の如きは其壯快豪宕の裡尙一種紅流の悲曲を挿み、而も之を支點として前後に幾多の波瀾ある關鍵を生ぜしめ、男兒之を讀んで奮起し、婦女之を聞いて泣く、所謂一花却て兩花の觀を爲すの妙あり。其曾て人に語りて曰く「文句手爾葉多ければ何となく賤しきものなり。然るに無功なる作者は文句を必ず和歌或は俳諧などの如く心得て五字七字等字配りを合さんとする故、自づと無用の手爾葉多くなるなり。例せば年はゆかぬ娘と云ふべきを年はも行かぬ娘をばと云ふ如くなること、字割に拘はるより起りて、自然と詞づら賤しく聞ゆ。去れば大やうは文句の長短を揃へて書くべき事なれども、淨瑠璃はもと音曲なれば、語る所の長短は節にあり、然るに作者より字配りをきつしりと詰め過ぐれば却て口にかゝらぬ事有物なり。此故に我作には此拘りなき故」云々と自己の省筆法を説明して節奏に便ならしめ、又「都て淨瑠璃は人形にかくるを第一とすれば、外の草紙と違ひて文句皆活動を肝要とす。殊に歌舞伎の生身の人の藝と軒を並べてなす業なるに、精神なき人形に様々の情を持たせて見物の感を取らんとすることなれば大概にては妙と云ふに至り難し。某若き時源氏物語花散る里の巻を見（橘）の雪を拂はせければ傍なる松の枝もたわゝなるが恨めしげにはね返りて」とある一章に至り是を手本として我淨瑠璃の精神を入るゝ事を悟れり」云々と、又語るらく「昔の淨瑠璃は今の祭文同然に尤も實なきもの成しを、某出で、加賀様より筑後様へ移りて作文せしより、文句に心を用ふること昔にかは

りて一等高く、例へば公家武家より以下皆それの格式をわかし、威儀の別よりして詞遣ひまで其うつりを專一とす、此故に同じ武家なりといへ共或は大名或は家老其外祿の高下に付いて其程々の格をもつけて差別を爲す、是も讀む人の夫々の情に善くうつらん事を肝要とする故なり」云々と、又人の「今時の人は能々理法の實らしき事に非ざれば合點せぬ世の中、昔語も當世受取ぬ事多し、去ればこそ歌舞伎の役者なども兎角其所作が實事に似ることを上手とすれ。立役の家老職は眞の家老に似せ、大名は大名に似するを第一とす。昔の如く子供だましのやうなるは取らぬなり」と云ひしを論して曰く「其議論は一應尤の様なれども藝と云ふ者の眞實のいき方を知らぬ説なり。藝と云ふものは、實と虚との皮膜の間にあるものなり。成程今の世は實事に似るを好む故、家老は眞の身振り口上を寫すを善しとすといへ、去れば逆、眞の家老が立役の如く顔に紅脂白粉を塗る事ありや、又眞の家老などが顔を飾らぬ逆頭のはげなりに舞臺に出で、藝をなさば慰になるべきや、皮膜の間といふは是れなり。虚にして虚に非ず、實にして實に非ず、此間に慰みがあるものなり。是につきて、去る御所方の女中一人の戀男ありて互に情を厚く通はしけるが、女中は奥深き坐敷に住み、男は奥方へ入る事叶はず、朝廷などにて御簾の隙透より見るさへたまさかの事なれば、餘りにあこがれて、其男の像を木に刻ませ、面體なんども常の人形にかはりて其男に毫程も違はず、色艶の彩色は云ふに及ばず毛の孔までもうつさせ、耳鼻の穴、口の内、齒の數まで寸分違はず作り立てさせたり。誠に其男を傍に置きて之を作りたる事故、其男と此

人形とは精神のあるとなきとの違ひのみなりしが、女中之に近づきて見るに、生身を直に寫してはほろきたなく、怖氣立ち、さしもの戀もさめ果て、傍に置くもうるさく、やがて捨てたりとかや、是を思へば生身の通りを直に寫さば、楊貴妃とても愛憎つきぬべし。それ故に繪を事述、其像を畫くにも木に刻むにも、正眞の形を似するうちにも又大まかなる所あるなり。演劇も此の如く、眞の事に似るうち又大まかなる所あるが結句藝になりて、人の心の慰みとなるなり。文句のせりふなども此心入にて見るべき事多し」と、嗚呼何ぞ夫れ諄々として藝術を説く事の忠なる。宜なる哉、此等の例語は近松の典型として見るを得べく、將た斯道の金科玉條として豫後の天地を支配し、眞に千歳不磨の觀を呈し居る事の偉なるを。

聞説眞珠は鮑より出づと、然れども鮑必ずしも眞珠を出さず、其之を出すや固より偶然ならざる可からず。初め井上播磨様大阪に崛起し、宇治加賀様京都に盤居して其長短を爭ふ。當時近松は播磨の爲めに著作し又加賀の爲めにも作り、其何れたるを擇ばざりし。天王寺の五良兵衛出づるに及んで目するに鮑中の眞珠を以てす。五良兵衛遂に播磨の地節の長うして、音を表とし節を裡に置むると、加賀の地節短うして、音を裡に隠し節を細にすることを取捨し序破急を定め竹本義太夫と稱するに至つて相容るゝ恰かも水魚の如く、爾來他の爲めには一本をも作せざりし。果然義太夫は筑後様となりて淨瑠璃樂を大成し當代の泰斗となりし者、彼に卞和の明ありと謂つべし。嗚呼德孤ならず彼の妙文は竹本の節奏に依り

て一段の發揮を爲し、竹本の節奏も亦近松の妙文に依りて一層の彩華を加へ、克く木偶劇を以てして生身の歌舞伎劇と顔顔して相下らざりしのみならず、却て歌舞伎劇を薰育し、日本戯曲の大革命を成し遂げたる等豈偉大ならずや。

(未完)



載所纂類曲聲

講筵

●忠兵衛 梅川 冥途の飛脚 (ついき)

青瑠璃漢

是此通仰下された。今日届かぬ故、大事の御用の手筈が違ふ。なぜ斯

様に不埒なご、鼻をしかめて云ひければ、

この條は、解説するまでもない、よく分つてをる。さて、鼻をしかめてが妙である。通常なれば顔をしかめると云ふのを、こんなにつたのは面白くきこゆる。

ハ、御尤く、去りながら此中の雨つゞき、川々に水が出ますれば道中に日ごこみ、銀の届かぬのみならず、手前も大分の損銀、

これも不解處はない。日ごこみは日數のかゝること。

もし盜賊が切取るか、道からふつこでき心、萬々貫目取られても、十八軒の飛脚宿から辨へ、けし程も御損かけませぬ、お氣遣あられなご云はせも果す是さく、

もし途中で盜賊の爲に切取られたのか、或は飛脚の出來心で横領したのか、よしそれにして假令萬々貫目取られても、貫目は金銀の十八軒の組合から辨償して、芥子粒はごも、御損はかけませぬ故、御心配なされますな、と云ふを云はさず、こりや／＼こりややい、

云ふ迄もない、御損かけては忠兵衛が首が飛ぶ。日限延ては御用の間、

明により、夫故の詮策、迎ひ飛脚を遣はして、早速に持參せいこ、この條も、よくわかつてをる。

徒士若黨も刀の威光、銀ごしらへも迂散成、なまり散して歸りしむ、徒士若黨風情の甚内も、主の威を借り、威張散し、銀ごしらへも怪しげな鉛でかな有らう刀の鑑反かへらせて立歸つた。銀ごしらへより鉛をいひて、訛にかけたる手際實にうまひものだ。

又頼みませうく、中の島丹波屋八右衛門から來ました。江戸小舟町米問屋の爲換銀、添へ状は届いたが、銀はなぜ届きませぬ。

漸く甚内を歸せば、又やつて來た丹波屋の使、

此中文を進しても返事もござらず。使を遣れば、酢の蒟蒻のご、いつ届けさつしやるぞ、此者に渡して人をつけて下され。手形戻そこ申さる、サア金子受取らうと立はだかつて喚きける。

此者は使自分のこと、手形戻そこ申さる、は主人八右衛門からの囑附をそのまゝいつてをるのである。此の使のすさまじき勢は立はだかつて喚きける、とあるので活躍してをる。

主思ひの手代の伊兵衛、さわがぬ體にて、是お使八右衛門様む、其様に理窟臭い口上は有まい。

喚き立てる使に引かへ、伊兵衛の沈着いた言分、すこぶる對照の妙がある。

五千兩七千兩、人の銀を預つて、百三十里を家にし、江戸大阪を廣う狭うする龜屋、そこ一軒では有まいし、おそい事もなうては。

おびたいしい金銀を預つて、百三十里を家とすれば、江戸から大阪までを廣くも、狭くもするこの龜屋の商法、取引はそこ（お前の所）のうち一けんではないぞや、時により遅うなる事もなくては協はぬ遅うなるまいものでもない。此の所、理非ますく明白。

今でも旦那歸られたらば此方から返事せう。五拾兩に足らぬ金、あたかしましう云ふまいこ、かさから出れば氣を飲れ、使はまじめに歸りけり。

今にもあれ主人忠兵衛歸宅なさば、こつちから持つて行く、五十兩にも足らぬ端金、あた喧しう云ふまいどあべこべに嵩にかゝつて遣り込めたので使はそれに氣をのまれて、ウンどもスンども云はずに、

音なしく歸つてしまつた。

母妙閑は、火燵の側放るゝこども納戸を出。ヤア今のはなんぞ、丹波屋の金の届いたは、慥十日も以前の事、なぜ忠兵衛は渡さぬの。今朝から二軒三軒の金の催促聞て居る。親父の代から、此家に銀一匁の催促ゑず、終に仲間へ難儀をかけず、十八軒の飛脚屋の鑑と云はれた此龜屋。

母親は火燵の側を放れることがないと云ふことを、納戸を出でと言ひ掛けたのである。妙閑の詞文字の通りにて、何等不解所なし。

皆は心もつかぬか。忠兵衛が此頃の素振がどうも飲込ぬ。昨今の者は知るまいが、じたい是の實子でなし。もごは太和新口村勝木孫右衛門と云ふ大百姓の一人子、母御ぜはお死にやつて繼母が、りのわざくれに、

昨今の者は、このごろ此の店へ來た者のこと、じたい是の實子でなしは、全體この家に生れた子では

ない。繼母がりの業呉には、まゝはゝにかゝつて面白うもない所から。

悪性ぐるひも出来るぞこ、父御ぜの思案で是の世取に貰ひしや。

悪性ぐるひ、又惡所ぐるひで、酒色に耽るこき。是の世取にもらひしがは、これの内の世取に貰うたが。

世帶廻り商賣事何におるか、はなれれども、此頃はそはくこ、何も

手に付かぬと見た。意見のしたい事あれど、養子の母も繼母も、同前

と思はうか、せはく云ふより云はぬ身を、耻入らせうと思ふて、目

をねふつても、聞所、見所は見て居る。いつの間にやら大氣になり、の

べの鼻紙二枚三枚手に當り次第、重ねながら鼻拭やる。

世帶向から商賣ごと、何一つ愚はないよい息子ではあるが、どうした事か、昨今はそはくとして何にも手に附かぬ様子じや。意見のしたいことはたんとあるが、實家で繼母に氣兼ねたやうにこの養ひおやも同じやうじやと思はれうかと、つひ氣おくれがするので、いつそせか／＼云はうより黙つて居つて、本人に耻ぢ入らせ心を直すやうと、じつと目を瞑つてはをるが、聞くべきことは耳にもはいる

見るべきことは、眼にも觸れるのは、まことになさけない。いつの間にか大けな氣になりをつて、塵紙でもあることか高價な延の鼻紙を、何枚も／＼手當りしだいに重ねて鼻をかみやる。

過行れし親父の咄しに、鼻紙びんびと遣ふ者は、曲者じやと云はれた

が、忠兵衛が内を出さまにのべ三折づ、入れて出て、何程鼻をかむや

ら、戻りには一枚も残らぬ。身が達者なの、若のこて、あの様に鼻か

んでは、どこぞで病も出ませうと、よまひごこして入れれば。

過行れし親父の咄しに、死なれたおやぢごのが云はしやつたのに、びんびは當時の方言にて、無茶苦茶、又は亂暴にと云ふ意なり。よまひごとは、愚痴な繰言である。老婆の苦衷察するに餘あり。

丁稚小者も笑止がり、早う歸つて下されかしと、待つ日も西の戻り足

見世さし比になりにけり。

丁稚も、小厠も、聞くもの、皆氣の毒がつて、早く主人がもどつて下さればよいと待つてをる。かしは願ひ望む意の詞です。召使の者等が待つてをる日も西に入りかゝつて、店をしめる時分となつたさしは、店の戸を閉すことだ。

駕籠の鳥なる梅川に、憧れて通ふ廓雀、忠兵衛はこぼくこ、外のく
めん、内の首尾。

出た、神ならぬ妙閑も、知るか知らぬか、化性物、籠の鳥同前の梅川、さて、此所の本文に、駕
の字入用であるまい。こがれて通ふ廓、即ち遊廓の略語、雀から忠兵衛と續けたは、何等のお手際ぞ
や。後の作者輩襲踏して珍らしからねど、翁ならではいかで。とぼくといひて、戸より外へか
け、尚續けて内と云ふ。然も、忠兵衛が我家ながら、内外に心を配るありさま、到れり。盡せり。く
めんは、工面のこと。

心はくもでかくなばや、十文色も出てくるは。

忠兵衛の心の中は、蜘蛛手、搔繩、十文字の如く、千々に亂れてをる。さて十文字と云はれぬから、
十文色とつけた。十文色は惣嫁のこと、夜鷹のことである。十文で色を鬻いだからいふので、暮色
迫り來りて、斯輩の出かけて來る時分となつたから。

南無三寶、日が暮れる、足を空に立歸り、門口には着けれども、留守の
内に方々の催促使、妙閑の耳に入つては如何様の首尾になつたも氣

遣はし。

南無三寶しまつたり。もう日が暮れるか(かの字を入れて見る)と足を空に(古歌、足を空にやかけて走
れる)駆け戻つて、我家の門口へ來るは來たが、留守の内(此の字は、中の方が正しい)に、諸所方々か
らの催促使が來たであらう。定めし養母の耳にもはいつたであらう。果してどんな首尾になつてをる
か心配したまらぬ。これはめつたに、うかつにも這入れぬわい。

誰ぞ出よ。内證を篤と聞て入りたしこ、我家ながら敷居高く、内
を覗けば、飯焚の萬め、酒屋へ行く體なり。

誰ぞ出て呉れるとよい。(かし前にいへり)とつくど様子を聞いた上ではいらうと、自分の家でありな
から、敷居高うてはいられず。そつと内らを覗くと、飯焚のお萬めが、酒買ひに往くと見えて、出
て來るやうじや。

彼奴は本で鼻もぎどろ者。只は云ふまじ。濡かけて、欺して問はんこ
思案する間に、によつと出る、樽持た手を確とあむれば、あれ旦那様
のこ聲立る。

木で鼻は、木で鼻をくゝるやうなといふこと、もぎどろ者は、没義道者、又没情者、すげないやつと云ふこと、濡かけては色事にかこつけてなり。酒樽持った手をえつかと握りまめると。

ア、喧しい。こりやすいめ。おれが首丈なづんで居る。思ひ内に有れば色外に顯る。目つきを汝も見取たか、可愛らしい顔付きで、氣の毒がらすはどようじやいやい。いつそ殺せと抱付は。

ア、こりや、やかましく云ふな。すいめは粹な奴めなり。首丈は、足駄はいて首丈と云ふ戀に浮身を扮すものゝこと。なづんでは思ひわづらふこと。思ひ内に有れば色外に顯はるゝは、聖賢の言。讀みて字の如しである。

ム、虚つかんせ。毎日く新町通ひ、のべの鼻紙二折三折、結構な鼻をかまんすもの、なんの私等に手ばなもかみたうあるまい。あの虚つきちと振り切るを又抱ついて、汝に虚ついてなんの徳、實じやくと云ひければ、夫が定なら、晩に寢所へ御ざんすか。チ、なる程く忝ない。夫について、今ちよつと問ふ事有り云ひけれ共、それも寢所

でしつぱりと聞ませう。必ず欺しにさんすなは、そんなら私はお湯沸いて、腰湯して待ますと云ひ捨て、振切り走りけり。

新町通、思ひきや、すでにお萬までも知りたらんとは。結構な鼻、無限の味あり。延紙を出すこと頻々にして、悉く照應する所、妙の又妙。

お萬のいへる手鼻に到つては、更に又妙なり。なんの徳、この下にあらうぞを添へて見るとよい。夫が定なら、それが本當ならばなり。

忠兵衛は虚腹の立わづらいて居る所に、

忠兵衛は元より本氣でないことではあるが、案に相違して、折角の奇謀その効を奏せず。今はむしろ腹が立つ、この立つを立わづらひてと云ひ掛けたのである。わづらひは、往く能はず、去る能はざる體である。

北の町から、いかつげにくるは誰じや。ヤア、中の島の八右衛門。彼奴に逢ふてはむつかしと、東の方へ出違はへ、是、忠兵衛、

いかつげには、嚴つげになり。六つかしい形姿をいふ。逢ふてはむつかしと、逢ふては事面倒である。

はづすまいくくご聲かけられ。ヤ八右衛門、此中は久しい。昨日も、今日も、一昨日も、人遣うくくご思ふて何やかやご延引した。めつきりと寒い、親父の疝氣は、ば様の蟲齒は、

はづすまいは逃げるなどいふこと。此中は此の間から。めつきりは今も云ふきつうといふこと。忠兵衛俄に良策なく、矢鱈にしやべつて、瞞着せんとする所。

ア、いかう酒臭い、過しやるなく、明日は早々人遣うや、やれそが言傳したぞや。近日一座致したいと、たくしかければ八右衛門。

過しやるなくはあまり大酒をするなどいふこと、明日は早う人を遣つて、金を渡さう、この一言は苦しい辨疎。れそは今云ふレコのことなるべし。情婦を云ふ。近日一座致したいは、近い内に一所に飲に来てくれと云ふこと。めつたむしやうに、たくしかけく喋り立てたので、果せるかな八右衛門喝一喝して。

おけやい。口三味線に乗かけても、乗様な男でない。其方が商賣は三度でないか。身方へ上つた江戸爲替の五十兩は何として届けぬ。五

日三日は了見も有ぞかし。心安いは格別、高駄賃かくからは大事の家職。十日に餘れど埒明ず、今日も使を遣たれば、手代めが、さ高な返事した。よもや外へはさう有まい、八右衛門をなぶるか。

三度でないか、三度飛脚屋ではないか。身方はおれが方へなり。五十兩、先に忠兵衛の手代五十兩に足らぬ金といへり。此所や、矛盾なり。

五日三日、これは三日五日といふべきを、わざと置かへたので、文法の上にも三ツ四ツ二ツなど云ふことがある。了見も有ぞかし、このかしは前のとすこし違つて、有ぞよと云ふ意。高駄賃かくからは、高い運賃を出すからはなり。かくと云ふ詞は爲るといふ方言である。かさ高な返事ゑらさうな返事をしをつた。よもや外へはさう有まい、よもや外の家へは、そんなことはするまい。又、家職は家業のこと。

北濱、うつば、中の島、天満の市の側迄、親父共云はる、八右衛門、なぶつて能ば、なぶられうが、銀は今日請取、但仲間へこたへうが、先お袋に逢ふと、内へ入るを引留め、去こては誤つた。

う。つ。ば。は。執。なり。仲。間。へ。答。へ。う。か。組。合。十。八。軒。へ。吹。聴。し。て。や。ら。う。か。な。り。八。右。衛。門。の。激。怒。、。その。極。に。達。した。の。で。ある。

是。手。を。合。す。、。た。つ。た。一。言。聞。て。た。も。拜。む。く。こ。叫。げ。ば。、。又。口。前。で。濟。さ。う。や。梅。川。を。欺。した。こ。男。の。意。氣。は。違。ふ。た。云。ふ。事。有。ら。ば。サ。ア。聞。う。こ。苦。々。しく。き。め。付。ら。れ、

これ此の通り手を合してをる。たつた一言聞いてくれい。をがむくど大きな聲も得出さず、ひたすら頼めば、八右衛門、また口のさきで濟さうとするのか、あの梅川を貴様の口さきで欺したのとは、この八右衛門は男だからちと欺し勝手が違ふぞよ、エ、えかたがない云ふ事があるなら聞いてやらうサア早く云へと苦り切つてきめつける。

是其聲を母が聞けば、死んでも一分立ぬ事、一生の御恩ぞ、去ては面目ないこ、はらくこ泣けるも、何を秘さう此金は十四日以前にのぼりしが、知つての通り、梅川が田舎客、銀すくめにて張合かける。此方は母手代の目をしのんで、僅二百目三百目のへずり銀、追倒されて

生た心もせぬ所に、請出す談合極まつて手を打ねばかりこ云ふ。

ア、これ、その聲を養母が聞いては、たどへ己が命を捨てても、子の一分が立たぬ事ゆゑ一生の恩じやどうぞわめき立て呉れるな。さても面目次第もないと、はらくど流涕して泣いたが、漸く心取直して何をかくさう、その金は十四日も前に着いたが、お前も知つての通り、梅川が田舎の客、銀づくめで意地を張る、おれは養母や店の者の目をかすめて、たつた二百目三百目のへづつた小金、だんだんと追倒されて、今はつかぬ絶體絶命、生きた心地もせぬ所へ、彌々件の田舎大盡め、梅川を身請する相談決つて、もう手を打つといふことじや。

川が歎き、吾等が一分、既に心中する筈で、互の咽へ脇差の、ひいやりと迄したれ共、死なぬ時節は種々の邪魔附て、其夜は泣いて引別れ、明れば當月十二日、そなたへ渡る江戸銀が、ふらりこのぼるを何かなしに、懷に押込で、新町迄一散にどう飛んだやら覺はばこそ、段々宿を頼んで、田舎客の談合破らせ、こつちへ根引の相談しめ、

梅川が歎きと、おれが男の一分立たず。既に情死するはずで、互の咽へ冷い刃を當てたれど、まだ死

なれぬか、いろ／＼の邪魔はいりて、その夜さは泣いて別れた、その翌る日が十二日、お前へ渡す江戸の銀が着いたのを、夢のやうに懷にねちこんで、新町まで一散にかけつけたが、何處をどうして飛んで往たやら、一切おれは覺ぬくらゐ、だん／＼と青樓の主人を頼みこみ、身請の相談やめさして、どうやらかうやらこつちの方へ根引することに、相談を極めたのじや。忠兵衛耻を忍びて、心の秘密を打明せり。いかに沒義道なる八右衛門といへども、一片の同情なくて協はぬことゝなつた。あゝ色男金ど力はなかりけり。血氣壯なる時は、戒むること色にあり。實に金言。

(未完)



載所纂類曲聲

傳記

六代目染太夫自傳(續)

岡田翠雨様より、染太夫自傳一旦貴下へ返却致し置度他に話しも有之ば一兩日中に鳥渡來い、どの葉書を頂きましたので、直に糸屋町のお宅へお伺をしました。岡田様のおつしやるには四五日中に天王寺の方へ家を引越す事に成、又避暑旁國へ歸つて一ヶ月程遊んでくる積りゆゑ借つて置いた染太夫自傳、一先持返つて置いて下され、そして又一冊づゝ、近松會の編者に渡

三、師匠妻を迎ふる事

東都は、女人器用發明にて、女の音曲は、江戸に限ると云へり。師匠は、田所町伊勢忠の隠居所に在し時より、諸方の娘たちに義太夫を教へ來りしが、石町新道に移りし以來、益々稽古の娘連盛んに來ることゝなれるに、中に仲喜といふ女弟子あり。年は二十三にして、殊の外藝道の覺えよく物數少き人柄なり。爰にまた、日毎に稽古に來る荒木金治郎さま、藝名旦齋と云ふ旦那ありて、自身媒酌人となりて、右の仲喜を師匠の妻に世話せらる。

めでたく茲に婚禮も隅田川、仲喜の呼名を取かへて、お稻と改められしは、田穗屋に因縁ありと知られたる。

則ち當人の双親は、隣町堀留二丁目鋤屋茂兵衛とよび、夫婦一家のちなみを結ばれ、行末長き榮に

してくれ給へ、しかし、君の本だから、ごふです、君が原稿紙に寫して、會の方へ出して下されば好都合じやがどのお咄し、めつそふな、私共は淨瑠璃本の他に文字を書いた事はなし、逆も出來ませんと申したら、何君、淨瑠璃語りだつて現在此本が出來て居るではないか(自傳本をいめいて)分ればよい字體はごふでもよいとおつしやるので、それでは一番先生の小生顔して寫して見ませう、と斯考へました、もし級第したら、原稿紙を芝居の樂家に備へて置いて、扱面白く咄しの出た時毎に、各々書く事に仕ましたら、それこそ又一種特別の珍妙々たる雑誌あつめが、或は此雑誌に載せて頂き、面白い事に成かも知れませぬと存じ、先試みに第二巻だけ、染太夫自傳原文の儘を私が、原稿紙に寫す事に致しました。

竹本叶太夫

とは知られけり。

四、師匠の子源治郎誕生の事、

附り江戸大火にて師匠宅類焼赤阪

へ引越の事

師匠染太夫、女房お稻殿といと仲睦まじく、月を
歴て、お稻懐胎して、男子をまうけ、荒木旦那の
名附けにて、その子を源治郎と申す。祖父祖母の
よろこび大方ならず。夫婦慈しみ育てける。
此頃師匠は、堺町の芝居へ勤められて、梅川忠兵
衛の新町の段を語り居られ、前淨瑠璃はひらかな
大序より三段目までなり。則三段目は當地の津賀
太夫、二段目切が下り佐賀太夫事中太夫なり。此
太夫は、先岡島屋中太夫の直弟子にして、大阪に
ては政子太夫と云へり。扱又二段目の中、先陣間
答の所、太夫三人の掛合にて有しが、芝居閑にな
りて、掛合の所、代り役に相成り、梶原源太の役
中太夫、此の代役美咲太夫、腰元千鳥むら太夫、

實太夫曰く、當地は世人の知る火早き所なれば
實太夫は常々心得て、出火の用心にはかしこく
こしらへ、今の住宅の表八疊の間の天井は、只
見れば丸竹の天井と見ゆれど、火事の際は荷物
を片づける時の用意にして、すはと云へば、片
方の綱を手早く引けば、天井はたぐと下へ落
ちて、丸竹は一本々々に別れて、荷物の荷ひ竹
となり、又其中に荷物をくくる細引、及びいろ
は付にしたる名所書、帳面まで出るしかけなり
是を以て出火の要害堅固となす、常に見る人、
不思議に思ひ、之は何の爲かと聞くにぞ、その
譯を答ふるに、是は奇妙なり、上方者は用心ぶ
かいと笑ふ人もあり、感心する人もあり。
扱、この時は、常に苦顔の師匠も、この要害に
片頬に笑をふくみて、實太夫の戻らぬ間に綱を引
いて天井を落し、落くる細引おつとりて、自ら手
頃の荷物をこしらへ居らるゝ所なりしかば、實太
夫は直に手傳ひ荷造に忙しきをりから、強き北風

後に綱太この代役菅太夫、梶原平治は師匠染太夫、
此の代役實太夫なり。時は文政十二己三月二十一
日ひらかな盛衰記掛合の最中なれば、朝四ツ時な
り。實太夫は平治を語り居る所へ、出火知らせの
半鐘の音ジャン／＼と冴て聞ゆれど、見物も騒
がねば、床へ知らせもなく、心に掛れども、役目
大切と語り居る折しも、次第に火事大さくなりし
うだしと成るが否や、實太夫は床より飛下り、火
打出しと成るが否や、實太夫は床より飛下り、火
元の様子を尋ねれば、外神田なりといふ此所より
道程二十丁もある事なれば、芝居には氣遣ひなけ
れど、火元より師匠宅へは十四五丁あり、是もさ
のみ心配する程の事ならねども、只無人なればす
こしも早く歸りたしと、部屋の仕事もそこ／＼に
して、只一散に驅出し、空を見れば墨色の悪雲な
り。風は北風にて、師匠宅は風下なれば、南無三
一大事と、氣は矢竹、汗水流して師の宅へ走りつ
く。

に飛火して、早くも近所へ燃付ければ、内實お稻
さまは一子源治郎をいだき、堀留の親里へ逃げ行
かる。其中に見舞に來りし人々へ、荷物をそれ／＼
に渡せども、急火の事ゆゑ、たくみに造置しいろ
は附の札印も、帳面も役に立たねど、天井の丸竹
は大いに間に合しなり。
先荷物は大方に取り除けたりと思ふ折しも、早四
五軒隣へ火は廻り、手傳ふ人々唯の一人も残らず
遁歸りければ、後に實太夫一人力身立、これより
二階に残りし小間物、疊まで助けたしと思ひ、御
役人衆に叱られまはり、二階の格子叩き破り、疊
は元より、あたる物を幸ひ、大道へはうり出し、
それより我身も大道へ飛んで出、一間手車に荷を
積み、それより澤庵桶樽二三挺を出し、實子下
の常下駄まで、火中に入入りて取出し、心残りな
く此場をにげのき、取出したる荷物は、本町の河
岸端に集め置、番人を頼みて、師匠夫婦の在所を
尋ね行くに、堀留のお稻さま親里も焼うせ、更に

人々の行方知れず、何はしかれ、明店を見付けて住所を極めんと思ひ、家をさがせども大火なれば明店あらばこそ、其の上に火は今も眞最中にて、逃場へ火が廻り来れば、本町の川岸にも荷物はおかれず、呉服橋御門の内は大丈夫と、我一に持込むゆゑ、又も手傳ふ人をたのみ、此所へ荷物を置直すうちに、早日も暮て今宵は爰にて夜通しに戸障子を家根として寝んと思へども、まだ如月の半にていよいよ暮さはまさりける。

さて、此出火大火となりて、抑々神田の焼出より、南は品川の邊まで、東は兩國内と外、西は御城の堀際まで、凡南北三里餘、東西一里の焼亡にて、古今まれの大火と云ふ。すでに其夜も明ぬれば、火は今尙鎮まらず、焼跡のみは静なれば、諸方の善人お粥の施行、米錢の施待あり。

御公儀よりは、御救小家、諸々の御見附に建てられたり。扱實太夫三四日は、此の丸の内に諸方より施行を請けて居たれども、いつ迄も荷物を片

深川から三里も在る所を、毎日通ふこと能はざれば、山の手にて店を求めさせしとて、此人の世話にて、赤阪御門外の明店を借りうけ、急に深川のおかね兩親に一部始終を話し、それより小船にて荷物を運び、同年巳四月十八日山の手赤阪一丁目寄合町の家へ引移りけり。

かくて、追々家に居なれて、一ツ木の寄場に淨瑠璃を始めしに、何が大火のおびく、事珍しとて、殊の外大入繁昌をなし、世間も次第に人氣静まりて、我々の商賣景氣づくこそうれしけれ。

五、竹本實太夫常吉と喧嘩の事

東都は大繁華の土地なれど、とかく火事の騒ぎ常住にて、土地になじまぬ他國者は、風が吹けば又出火か、若しや焼ては來ぬかと、寒さの時分は夜も碌々寝られず、半鐘の音ばかり氣にするぞかし今夜は五ヶ所、昨夜は六七ヶ所と、出火の數を聞く度に肝を冷し、胸轟かすは田舎者の常なり。さ

附る所なければ、如何はせんと思ふ所に、此の時深川に師匠の女弟子おかねと云ふあり。此家に師匠夫婦、世話になりて居らるゝよしを聞き、大に安心をいたせり、尙又、その隣家に明店ありて、おかねの親喜八が引合にて當分此の方へ來れとあつき世話になり、小船をかりて荷物を積み、さうして深川の小船入と云ふ所へ立越ね、一同喜八の世話になりしが、何分淋しき所にて、手の平ほどの家なれば、ぎやうさんなる荷物を解はぎきすることならねば、大に不自由をして、只々世の中のおづまるをのみ待合して、三四十日は暮せしも、芝居寄場も大方焼失せて、漸く残れるものは此邊なれども、末町の小まかき所とて、寄場はあれども淨瑠璃をかけて詮なき事ゆゑ、働くこともならず、まだしも山の手ならば大場所なれば、寄を付けても引合になるゆゑ、ともあれ談合せんと、直様立越し相談せしに、寄場の亭主に悦び、談合極りしが、先方にも心配をして、申さるゝには、

れど土地に生れし江戸ッ子は、東西わからぬ折より半鐘の音を添乳にする程なれば、出火なき夜は却つて淋しくて寝られぬと云へり。

師匠染太夫は此の山の手に住馴れて、頃は菊月の始つたか、空も長閑なれば内實お稻一子源治郎に供人連れて親里へ保養がてらの見舞行き、泊りがけにて出られけり。扱て留守の居候は實太夫、始め三人あり。一人は供をして出たれば、あとには實太夫と、高の常吉と云ふ者となり。此の邊の遊所町といへば先赤阪の梅貴女子、三田の△、四ッ谷新宿などいふ女郎場所ありて、師匠を最負の旦那衆は折々遊所へあそびに行かるゝにぞ、實太夫もお供をして通ひし事は度々なれば、いつしか名染重り、旦那衆よりも熱うなり、ツイ己惚の通ひ路も、四ッ手駕籠のはふり込み、師匠の眼を盗みての遊び事、始は半時、一時が、ついお泊りの朝戻り、師匠は知らじと思ふが馬鹿、例の居候高常



め、女郎買より廻り、長半ちよぼ一、骨牌事、何處へはいるか、戻りには襦袢ばかりになりがたち、人は好かれど玄みたれた裸暮しもうたてられ。

此頃師匠は、酒宴の門数多く、先から先へと呑くらし、今宵も亦留守なりと、鍵を預かる身は尙さらに大事く、實太夫、師匠への仕へは堅けれど心の外の放埒は後にぞ思ひ知りたりける。

或日の事、師匠夫婦留守の折から、實太夫は例のちよんの間して立歸り、別に何事もなかりしに、師匠も此頃花々しくはいる所の在を見、何所から共云はずして、これの着換持来れど使の者をよこされしかば、鍵を預かる實太夫、箆筒の引出開けんとすれば、錠前は切れて、鍵は役に立たず、こは不思議と思ひながら引出せば、中にもぬけの殻ばかり、アツとびつくり仰天し、四方を見れば高常も居らず扱は彼奴めが合鍵をして、中の

ば、師匠の衣類持歸りたりとも間に合はねば、返す返すも高常に出し扱かれたることの悔しさよ。師匠への言わけも立たしと、髪も逆立、身内ふるひ、やゝ黙然として、こぼしを握り、果は男泣にぞ泣たりける。

やゝあつて、思案を定め、いつまで爰に待たりとて、甲斐あるまじ、一先爰を立去りて、彼奴引捕へ、取戻さんと、漸に氣を落付、ともあれ此の風體にては往來ならず、されど幸に日も暮たれば、人顔わかぬを仕合せ、心安き古手屋へ行き、持合す金にて、古着買求め、あはらしくも立歸らんとしたれど、どう云面さげて師匠の宅へ歸らるゝやど、唯ぶらゝと夢心地、今宵は寝るに家もなく馴染の遊所屋に一夜をあかし、夜の明るを待かねて、今日こそ悪き高常を捜し出さんと心を定め無手ではもしや仕損せんと、江戸の町をかけ廻り六七寸の小合口を買もどめて懷中し、出行先は博

衣類を持出したるに極つたり。たしかに博奕場に居るに相違なしと、氣も狂亂に、兼て知つたる行先へ、一目散にかけつけ、當人を引捕まへ、恨の数々取まて詮議すれど、高常は早文なしに成果て、氣拔の如く他愛もなければ、掴みつきても、打伏ても、所詮間に合ふ事なしと心に觀念し、實太夫が着たる縞縮緬の着物上下、緋縮緬の襦袢、上田辨慶縞の羽織より、銀金物の煙草入まで擲り出し、素裸になりて高常へ頼むやう、只今かくの次第なり、その品々渡さずば我等一分相立たず今が生死の境ぞや、汝が持出したる衣類、何卒戻してたべ、とく／＼此の品々と取換くれよと、ひたすら頼めば、高常は氣の毒さうな顔附して打うなづき、實太夫を待たせて、急ぎ馳出でけり。やゝ時うつるまで待てど高常戻り来ず、よもやと思へど、心ならねばかけ出さんにも丸裸、行先とても知れざれば、胸は早鐘氣も狂亂、早日も暮かゝれ

奕場と、人も知つたる屋舖の部屋、日暮を待つて入込む博徒等、折もよく高常に出合ひたり。我身の切なき物語りし、どうか仕様のなきことか、衣類を返して、戻してと佛を拜む如くにて、泣い一口説いて歎けば、彼は入墨の體をどつかと坐し、持前の地金を出し、再度師匠の家へ歸らぬ心か、人もなげなる野太き悪口、短氣の實太夫、もはや溜りかね、爰ぞ生死の境なりと、隠し持つたる懷中の合口閃かし高常が眉間目かけて只一討と切付しが、漸う浅疵一ヶ所負せしのみ、血は邊りにほとばしるを、今一討とする處を、相手も痴者實太夫が腕首しつかと引つかみ又物奪らんとひしめけども、此方は一生懸命、持たる相口離さばこそ、必死と争ふ折から、屋舖の事なれば侍衆大勢來りて、此の様を見るや否や、有無を云せず實太夫を取て押へ、又物ばいとり高小手手に縛りつけ、あたりの小間へ押込たり。

(未完)



聲曲類纂所載

雜 録

● 根引の松について

東京 荷葉 女史

本邦の沙翁たる近松巢林子の著作を研究し、その

した。そのうち又中山の牡丹觀について、與次兵衛は中山の人であるといふことも聞きました。當地早稻田大學で刊行の近松傑作全集にも解題はありますがどうか、専門に研究をなさる御會のことですから、此の根引の門松の實事譚をお掲載下さいますことは出来ないでせうか。ハイカッた女だと思召すかも知れませぬが、悪しからず御諒承下さいませ。

編者曰く、女史の要求たしかに承知しました。必ず三號に詳しく掲載いたします。

● 掛け、こぼの研究

棟 華

文法上から云ふのではなくて、淨瑠璃文句についてのいひかけ、即ち掛詞である。和歌にまれ、長短和文にまれ、狂歌、地口、何にまれ、句を綾どり章を飾るにつけて、この掛詞の巧に用ゐられたも

功績を發揚する目的を以て、貴會を設立せられ、最も趣味ある雑誌を刊行せられましたのは、妾の大に満悦する所であります。

つきましては、今後翁の著作に係る解釋の如きは續々御登載を願ひます。且又翁が作物中の精華たる世話淨瑠璃の如きは、其取材たる實事譚をも掲げられて一層作意の妙を味ふことを得べくせられたいものです。これは女として、生意氣な注文かも知れませぬが、想ふに他の方々にも同じ希望を有してゐらつしやるかも知れませぬ。

それで、厚顔しくも直にお願ひしたいことが有ります。それは矢張近松翁の傑作中の世話物で、山崎與次兵衛根引の門松であります、これは淨瑠璃に通有の悲劇の點はすくない、出世景清などいふ様に題からして、めでたく以來てゐます。數年前妾が御地に住んでゐたころ、新町細見記をよんで山崎與次兵衛が吾婦太夫を根引したことを知りま

のは、讀者をして一唱三歎の價あらしめるものである。殊に淨瑠璃文句は雅俗(も)を混同して、自由自在に使用してをるから、音調を整へる上にも一大關係を有してをって、又聲律の諧和するものも實に此ものに存して居るのであらうと思はれる。今茲に二三の分類をして見て、斯道家の參考に供したい、元よりその一部分である。

一、單純なる云ひかけ

1 得もいはしろのむすび松、

○ねも云はぬと云ふことを、岩代にかける。

2 互にこゝろおくの間へ、

○置くを奥にかける。

3 辭儀も作法も白砂を、

○知らぬを白砂にかける。

4 如才内儀の汲んで出す、

○如才がないと云ふことを内儀にかける。

5 それとしら齒の娘氣に、

○それとも知らぬと云ふことを白齒にかける

6 それと白髪之母おも、

○それと知らぬを白髪にかける。

7 顔も深雪がなれの果、

○顔も見るを深雪にかける。

8 戀ゆる心つくし琴、

○心を盡すと云ふを筑紫にかける。

9 誰かはうきを斗爲吟の、

○憂を問ひてくれるを斗爲にかける。

10 願へばせひも中の間へ、

○是非もなきを中にかける。

11 泣いて明石の風まちに、

○明しを明石にかける。

12 せひも泣々、

○ないを泣にかける。

13 譯もことばもなみだ川、

○驚ろくの助辭を六藏にかけてある。

だいすの釜の音近が、(蝶花形)

○音をおどちかにかけたる、(近いといふに)

思ひあまりてあさか姫、(合邦辻)

○あさましを浅香姫にかけたる。

同じ思を信濃屋の、(桂川連理櫓)

○思をするを信濃にかけたる。

親の心も知らぬ子のわけも七つの重若丸、(太功記)

○無を七つにかけたる。

廓雀忠兵衛、(冥途飛脚)

○雀より鳴聲にかけたる。(これはこの分類に入ら)

心のかげご一重二重あけぬ重兵衛、(伊賀越)

○これは數字にもかけたるもの、即ち二重の

いひかけである。

打敷て横になるとの阿波大盡、(夕霧阿波鳴戸)

○成を鳴門にかけたる。

天窓角助佛頂面、(同上)

○ないを涙にかける。

14 譯も涙にむせかへる、

○同前。

15 涙は胸にみち潮の、

○満を満潮にかける。

こんなのは、かぞへあげる事ができぬ程あつて、
和歌、和文にも云ふ所の物で、毫もめづらしくな
い。

二、人名にかけたるもの

せめとはれてもゆふしでは、(荊萱桑門)

○云ふを木綿にかけてある。

お氣遣あそばすなどゆふしでを、(同上)

○同前。

何とことばも傳兵衛が(河原達引)

○出ぬを傳にかけてある。

おどろく藏が、(神靈矢口渡)

○搔くを角助にかけたる。

この他、名詞にかけたるものは、澤山あらうと思
ふが、これ位にしておいて。

三、一重の云ひかけ

其一、數字をつらねたるもの

彼方は十面こなたはくめん睨み合ふて居る所へ、

○溢面を十として上面を九とする。(荊萱桑門)

心に一物荷物かたげて、(伊賀越沼津)

○一物より荷物を二もつとなす。

國家を治むる智仁勇三國名譽の夜光の珠、(荊萱桑門)

○智仁勇の三つより三國にかけたる。

酒も三ツ四ツ五ツ所紋羽二重も出す入らず、(冥途
飛脚)

○三四五及び二とつゝけたる。

四十九日や五十兩合せて百兩百ケ日、

○四十九五十百とつゝけて百ケ日にかへる。

四、同

其二、首尾關係あるもの若

しくは寓意あるもの

計略と云ひ義心と云ひこれ程の家來を持たながらあ
さきたくみの鹽屋殿、(假名手本忠臣蔵)

○あさきたくみは淺野内匠か。

親子の縁もこれ限りきりきりとうせをらう、(赤垣
(出立)

○縁を切るよりきりきりきりといひ、又限りより
きりといふ。

縁の切石ふみづたい、(蝶花形)

○これ夫婦の縁を切りたるによる。

尾をふむ心地虎の間へ伴ひいらせ玉ひけり、(菊門)

○虎尾をふむの句による。

身のをはりさへ定めなき、(朝顔日記)

○美濃尾張にかけ前途の覺束なきに及ぶ。

いつかはめぐりあふ阪の、(同上)

○廻り逢阪に如上の意を含む。

消残りたる身一つを道に捨も椽先の、(同上)

○生残れる身に捨も得ぬを椽にかけたる。

云は仔細の有ぞとも知らぬ佛氣徳右衛門。(同上)

○知らぬ佛に又、佛の徳をかけたる。

うはべは解けてもとけやらぬ前垂かけの下女お鍋
(同上)

○解けぬ心の二人の前と前垂のとけぬとにか
けたる。

あふこさへも片絲の、

○逢ふに合ふをかけ、難きに片絲をかけたる

弘誓の船にのりの道、(朝顔日記)

○乗を法にかけて、船の縁語を働かす。

夫を戀し小石の數袖や袂に拾ひ込、(同上)

○戀しと小石とをかけ、首尾の續を調ふ。

何に遠慮もなざさ漕ぐあまのを船やとろく目、
(菊門)

○無を渚にかけて、船より遠の眠を意味す。

五、稍複雑なるもの、例少

きもの

脇息に押直させふたりが臂をかけまくも賢き國の
和歌の道、(菊門)

○掛けるより冠詞にかけたるもの。

いなにはあらぬ稻舟のたゞよふ心を押沈め、(同上)

○初句より末句までかゝれる。

否むを引立奥の間へ入るやいるさの月影に忍のみ
だれみだれ合ふ、(太功記本能寺)

○入佐山の月より忍の忍草に及ぶ。

錫杖がらゝいのちからゝ、(油地獄與兵衛内)

○がらゝとからゝとをつらねたる。

六、此の他のもの

顔にとり粉の面白くてよね衆のわらひ、

○二重以外の含蓄あり。

●巢林子の遺墨

東京 因果菴主人

予が郷里は木偶芝居に名高き源之丞の隣村にして

○重掛のあと見えてこれも普通にあらず。
(未完)

昔より自ら音曲一般に流行す。殊に父なる人の素人三味線に有名なりし故を以て、予も物ごゝろ付きし時より既に淨瑠璃の節や、三味線の音に親めり。去ながら父なる人は、世は昔と異り、今は學問なくては人の中にも出がたく、幼きより遊藝などに耽るべき時にあらずといひ、曾て予に之を學べとは勧めざりき。唯夫の近松門左衛門の事に至つては、幼な語にも話し聞かされ、予が耳には確に孔子、孟子の名よりも早く傳へられたり。

斯くて江湖に放浪すること年あり。漸く鬢に二毛を見るに及び、不圖したる機みより天狗黨中の一人となり、今は家名を辱めず、郷風に深切なる奇篤者となれり。所謂越鳥南枝に巢み、胡馬北風に嘶くの類か、而して其熱度の昇ると共に、近松の遺作に親炙する事、日に益々頻繁となり、物を囊中に探るが如き其宏博の識と、天馬空を行くが如き其縦横の才、とに敬服するの念愈々深きを加へ

色彩は濃厚ならずといへども、衣裳の模様等頗る綿密に描き成せり。落款に「巢林子信盛戲書之」とあり。其字行草を交へ、至極老靜にして柔婉なる所あり。下に一印あり、徑七八分の圓形中、朱文にて蝶の如きもの見ゆ、霞か、水か、横線三五、左右上下に列なる、その何の意たるかを解する能はず、恐らく偶意の畫形ならん。紙面全體一點の汚蝕なく、古氣饒かなりと雖も筆痕尙は鮮明なり。表装も亦卑からず、容るゝに桐篋を以てす。此幅何れの家より如何に轉々して、遂に街路に曝さるゝに至りしか、固より其逕路を知るに由なしといへども、其書を見れば全然素人の筆にして、絶て作家然たる氣風を具へず、然るにも係らず一種趣脱優悠の氣を帶び、雅致掬すべきものあり。摸作贋造の品とは思はれず。又如何に考ふるも、應舉、探幽の如き名工とは違ひ、餘事に彩毫を弄びし人の筆を、古き昔に贋造して世に鬻ぐが如き

崇拝禁すること能はざるに至る。蓋し徂徠、山陽、西鶴、馬琴を以て之に比するも、優りこそすれ、決して劣る所なきは、此人の大文字なり。

其感應にや、昨年の春のことなりき。一夜偶々銀座通りの夜市に於て、近松の筆に成れる畫幅を得たり。長約二尺六七寸、幅約九寸餘の紙本にして圖は、黃巾面を包み、紅衣にして腰法衣の如き裳を着け、長刀と一腰とを佩び、飄逸愛を知らざる様に見ゆる中老、年少盛服、同じく一刀を腰にしたる若衆體の男、雲鬢高く結び艶色滴らんと欲する美少婦、小鼓を肩にし、背に釘抜形の大模様ある派手衣裳を着け、一刀を腰にせる壯漢、綠髪長く垂れて、斜に背面を見する一婦、以上五人兩列となり、鼓者を除く外、何れも皆扇を手にして面白げに踊り居る所なり。而して上の方に淡く橋欄を寫し、中天には薄雲の間に一痕の涼月懸り、人影長く地に曳けり。筆法全く浮世繪に同じく、

事は決して有るべき様に思はれざれば、予は外に此人の眞迹を見しことなけれども、我此幅を以て眞筆に相違なきものと自信す、書畫好きの知友ども皆予の説に賛成なり。之に就て思ひ起すは、いつか新紙上に於て、大阪何某氏方に、近松の筆になる盆踊の圖ある報を讀みしことあり。左れば此圖は近松の平生好んで作りしものなるか、折あれば比較して見たきものにこそ。(利教云ふ必ずその便宜をさるべし)。

因に記す、故友大河内氏(歌舞伎座社長たりし人)曾て近松の消息を所持する由、予に語りしことあり、見に行かんと思ふうち世を去りぬ。定めて今にても其家に藏するならん。唯短きものなりとのみ聞けり。偕て予は右の一幅を得て欣喜措く能はず、之に對すれば、巢林子の靈髮髯として現れ出づる想あり。是より予は淨瑠璃一段の進境に入れるを自覺す。

如今演奏せんとする日には、之を床の間に掲げ、

麝香百拜、上出来を祈るを家例とす。

昔者英の文豪「カアライル」言へるあり、「印度帝國の有無何かあらん」「シエークスピア」無かるべからず印度帝國は何時かは當に去るべし、然れども此「シエークスピア」は去ることなく、長へに吾人と共に存すべし、吾人は我「シエークスピア」を棄つる能はず」と、嗚呼巢林子、我國人に取つては少なくとも、臺灣と吊り替へ位の價值十二分なり。是れ必ずしも源之丞の隣村に生れたる、予の私言に止まらざるべきを信ず。(庚戌盛夏東京三線山南の僑居に於て)

●瑠璃の屑 (ついで)

○操芝居の木偶も、往昔は今の如く完備してゐない。足などは全く無かつたのを、山本土佐様が角

一月から三年越十七ヶ月打續けたのである。

享保六年八月竹本座にて、信州川中島合戦興行の時、山簾を張ぬきの本山に作り始めた。これまでは、すだれに山を畫いたものを用ゐてゐたのであつた。

享保十八年四月車返合戦櫻大森彦七の木偶に、指頭の動くしかけを始めた。同十九年十月蘆屋道満大内鑑に、與勘平の人形の腹のふくれるやうに仕始めた。

延享二年七月夏祭浪花鑑に、木偶に帷子衣裝を着せ始めた。享保十九年正月豊竹越前少様、若太夫の座にて。北條時頼記二度目の興行の時、正面の床を横床に仕始めた。元文五年九月武烈天皇の儀に、佐手彦の木偶を眉毛の動くやうに仕始めた。斯の如く、年々歳々に、工夫を凝し、意匠を盡し、今は眼の働き、口及び舌の開閉出入、毛髪逆立ち腹動き、琴三味線を調べる爪先まで動く

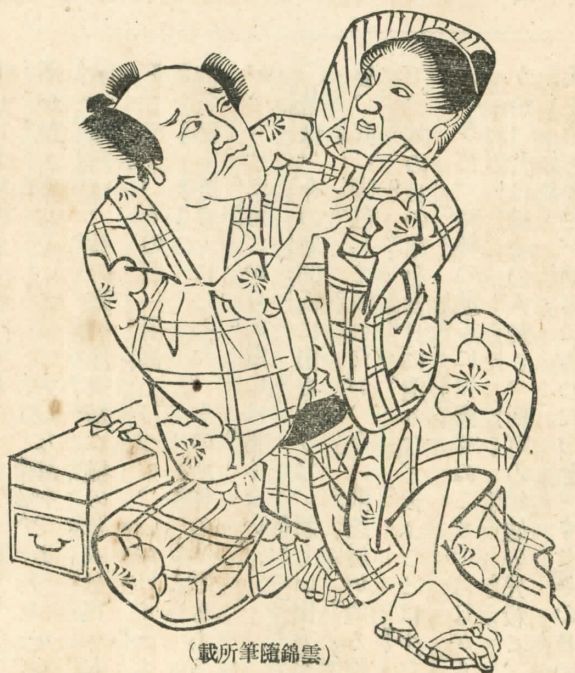
四〇
太夫時代に、源氏烏帽子折の狂言に、藤九郎盛長澁谷金丸の二つの人形に、始めて足をつけた。

無論元祿より以前のことである。その後、宇治加賀様が嘉太夫の時、世繼曾我の淨瑠璃に、朝比奈の人形に、足を附けてから、諸流ともに擧つて、立者の人形には足を附けること、なつた。

寶永二年三月、竹本筑後椽、義太夫の芝居にて、近松翁作の用明天皇職人鑑の鐘入の段、出語りにて太夫筑後椽、三絃竹澤權右衛門、おやま人形辰松八郎兵衛出づかひを仕始めたのである。

正徳年中までは、淨瑠璃文句短くて、間の物にのろま人形の道外、またはからくりなどを加へて、勤めたが、正徳五年十一月朔日から、近松翁作の國性爺合戦を、竹本座にて、興行する事になつてのろま道外機關などは、一切加へぬことになつたさうな。この國性爺は、古今未曾有の大當で、十

やうな完全なものになつたのは、かゝる幾多の進歩改良の歴史を有してゐるのである。



(載所筆隨錦雲)

○人形のついでに、馬鹿道化の野呂松人形のことをいつて見よう。寛文延寶年間、江戸和泉太夫座

に、野呂勘兵衛と云つた人形つかひがあつた。頭局たく、顔色青黒く、頗る卑俗滑稽なるものをつかひて、のろま人形と稱した。そこでいつしか阿呆の代名詞となつてしまつた、この野呂勘兵衛を本家として、京阪の操芝居に、野呂間、鹿呂間、鹿呂七、麥間等の名を附けた人形をこしらへ道外たる聲色をして、淨瑠璃段物の間に狂言をしたと竹豊故事にかいてある。放蕩物を野良むすこ盗猫をのらねこなごいふは、これより出たものか（口繪野良人形の書参照ありたし）

○いかけ 曾て一つがひの駱駝が舶來した時、夫婦連で通行するのを駱駝といつたが、其後いづくの者か、老人夫婦の鑄掛屋、日毎に土瓶のいかけとよばりて、大阪市中を廻つたから、駱駝といふ流行語の廢つた折とて、夫婦同行を土瓶のいかけと云ふやうになつた、子供を連れたのは急焼をつれるなどいつた。文政七年二の替り角の芝



聲曲類纂所載

藝評

●空也念佛堂三味線會

(日本一の文樂座連)

珍無類の厄ヶ崎——十種香の一段は唐にも日本にも無いと評判された二十三孝——八重姫垣は大愛嬌、可愛らしい情味の……で、自笑に堪へぬ。僕はモリ語らんと言ひつゝ床から一目散——廣作の寺子屋、お師匠ハシ揮つてゐマシで——清六の合邦、風呂屋で聞いたよりは上等です——三味線の津太夫は大に本會のレコードを破つて大愛嬌あれが文樂の津太夫ですか?……は揮つてゐる、——吉兵衛と綱造は到底眞面目で語りましたな——大切の野崎村で會場の念佛堂を震動させる——木原席太撥藝妓袖吉姐ハシお御酒加減——竹本染太夫の三味線、淨瑠璃の中止、三味線の趣意を大に發揮した染太夫の大滑稽、——マア——怪我がなうてお目出度……の當文

居に、中村歌右衛門梅玉が大切の所作ごとに、これを仕組みて、親仁の出扮にて團扇を携へ、此うちはに老婆の顔を書きこれで、兩人の所作をした所が最も奇らしいとて、大變な評判であつたから歌右衛門は、彼の鑄掛屋夫婦に揃の單衣を與へたそこで又、その名一層高くなつて、いかけと云ふ流行語も亦盛んになつた。その所作の唱歌もあるが、ちと卑猥だから此處には書くまい。

○昔は、今の新聞紙に出るやうな、新しい出來事を、直に脚色して演じたが、今は俄芝居が遣る位で、其の日の事を當日に遣るなど云ふことは少ないやうだ。時勢の進歩に相應せぬことではなからうか、昔は神崎の人殺と、新町の娼妓の兄殺と、大工の心中とが同日にあつたのを、すぐその日の芝居に取組んだといふではないか。(棟華)

句は大に揮つた——ヤツチヨロマカセのこりわいな——堀江のお師匠(染太夫)サン萬歳々々……。

中村 吟翠

◎三味線會とは名稱の如く、平素檜舞臺で三味線を操縦し、女房役となつて常に、淨曲の美妙を發揮しつゝある、一廉の三味線彈が、亭主役の太夫資格となつて、柄にも無い音聲をホジクリ出すと同時に、一方相手の女房役は即ち、一年三百六十五日音聲の研究してゐる染や、津太夫など堂々たる太夫が、平素持附けた事のない三味線を、得意然として弾くのだ。結局太夫と三味線彈きは、お互に反對の位置にあつて物を演じる……と、云ふのが原則で、所謂三味線彈きの方が物を言ふから三味線會と命名した譯である。而して太夫も三味線彈きも、馴もせぬ研究をしてゐる無い藝當を、眞白面に演じ終つたのちア面白くない、大にスカッハを演じて滑稽の店卸し、聴衆をして抱腹絶倒、

大にお臍の轉宅をさせなくちやア、法律違反……
イヤ音律違反として、三味線會の趣味を没却した
ものと言つても宜い位であるのだ。

◎去る七月五日御靈文樂座の連中が、誤奇特にも
常に信仰する新町遊廊は、有名な空也上人(田中氏
の別宅)、銀に合した佛念堂に於て、デン／＼宗の
三味線會を開催した。記者は開演の五時に先立つ
て、殊勝にも珠數の代りに、闇魔帳と鉛筆を携帯
しての御參詣……イヤ本部から急使を以ての出張
命令に、時を移さず往聴したが、道に日本一の文
樂黨が滑稽的の、珍會を催すだけあつて、満場立
錐の餘地もないと云ふ素晴らしい光景、而して婉曲
數番大に滑稽を演じて「淨瑠璃を中止するなどの
騒ぎは大愛嬌、殊に染太夫や津太夫の三味線と來
たら、文樂や堀江は思か恐らく天下絶品のね色で
ボテン／＼／＼モテン／＼／＼……とは蓋し前代
未聞の珍……如何な聴客も是を笑はなければ、人

袖も濡衣が今日、命日を吊ひの位牌に向ふての一
條『『廣い世界に誰あつて、おまへの忌日命日
を吊ふ人も情ない』なぞと、新内節の出來損いを
聞かされた、情なさは濡衣ばかりぢやアない。』月
にも花にも樂みは』まだ／＼早計だよ』書には書
せはせぬものを』は寫眞に採つて置きたかつた。
『泣涕こがれ泣き給へば』と來たら堪つたもんぢや
アない、ボロイもぼろい涙ばらうて堪らないから
太夫サン大に笑ひつゝ、床から飛降て一目散
入替つて唸出した太夫サンも御同様に大愛嬌。『又
立戻つて、畫姿に』なぞと大詰り、手を合せ云々
で滑稽の種蒔き、夫から八重垣姫が濡を介して戀
愛主義を發揮するの一條、『可愛らしい情かいの
と』で大に漬物屋を困らせたのみならず、太夫セ
ンセイ自笑に堪られないものだから、法性の兜を
脱いでの大降參、僕はモウ廢るワ……何しても語
れないワ……と言ひつゝ、床を引下つたなぞは揮つ

間サマのお仲間ぢやア無いと宣言せられた位だか
ら、満場は笑聲續出、季節に因む朝顔といふでも
あるまいに、さりとては祐仙式のお笑ひよりヨリ
以上で、盤城式に不粹な者は一人もなかつた。而
も力士然たる圖體の染太夫が床から落下した際に
満場の一隅から南無阿彌陀佛々々々々々々、會
場に因むで？のお念佛を唱へたなぞは面白かつた
が随分揮つた惡戯言であるワイ……。
◎處で露拂の太功記は助八といふ、相當に鳴す若
手の三味線弾きであつたが、唸る方と來たらカラ
ものにならぬ。重次郎や初菊が踊り出しさふで、
老婆の節義も苦しい、操のクドキに當られて、仁
丹が欲くなつて來たとは、珍無類の尼ヶ崎であつ
た。三味線は誰だか分らなかつたが、御兩人とも
横町の味噌屋を大に困らせたさうだ。
□お次は矢張御簾内での十種香、行水の流れと
……出演者の咽喉は薩張分らないものだ。泣音に

たものだ、但し唐にも日本にも無いと評判された
程の二十三孝、前者は助八、後者が兵三で、女房
役の三味線は拾三であつたさうな。

□市彌の櫻丸切腹は案外眞白面であつたが、語
物に因むで大に苦しい如であつた。三味線は前席
に於て、二十三孝を唸つて笑はせた助八クン、聴
客に視線を引かれての果報者……。

□兵三の『尼ヶ崎』奥光秀が操の方を叱責す
る條から語出したは頗る奇抜だ。『妹春の別れ愛
着の』で、鳥渡男前をあげた。以下の語口はヤマコ
的大車輪が大喝采であつた。

□次は野澤吉兵衛で、越路太夫の相三味線だけ
に大歡迎、語物は踏掛村であつたが、流石は越路
相手の人だけに、旨味ものだ、但し舞臺は小さい
が、品の佳いことは無類飛切であらう。而して此
一段を始終眞白面に語つたは、エライもので、三
味線彈の淨瑠璃としては蓋し、名字に因む上々吉

の部であつた。大喝采……。

□入替つて出演したのが、髯武者の號ある豊澤廣作センセイ、流石は當廓の義太夫藝妓に薰陶しつゝあるだけに、お師匠サン／＼で大歡迎された迄は宜かつたが、語物の菅四を源藏戻りから唸出しての大滑稽、剩さへ此人は張子の虎の如に時折り小頸を振る癖のあるに、さりては又扇子を頻に叩きつゝ、御自分から間拍子とつての語振には、三味線彈の某も大に脂をとられてゐた如だ、まかも寺子檢めの一條、子供呼出しの間に於ける扇拍子の度數と來ては、餅搗をつくりだ。お刺に語る節廻しが流行したラツパ節類の如であつたから、聴客は大に噴出した、廣作センセイもクツ／＼笑ふた、その効能や忽ち鎗一番。ヤレお師匠ハン揮つておマンで……と、別嬪から參られたなどは揮つたもんだ。然して其子供檢閱の區切りから直に、段切のいろはオクリに飛附いて「御臺

若君諸共に」ナンカンと糞度胸を据て語つたなどは正氣の沙汰ぢやあるまい——と言ふ評判もあつた。是が日本一の文樂座に於ける竹本染太夫の相三味線、豊澤廣作センセイの出演した、スカ原ヘンチコ屋の一段、とても二度とは聴聞の出來ぬ有難い淨瑠璃であつたから大喝采……。

□鶴澤綱造の長局は至極眞白面で毫も失態を演じない、のみならず始終優美に語つて、曲中の人物を活躍させたは流石の綱造である。「跡見送つて襖の蔭」云々の地合からシツクリと語出し、節尻が綺麗で詞も美しい。お初の可憐尾上の優美、舞臺は小さいが、人形を眼前に觀せた如な語口であつた。尾上が内に煩ふ思惑と、表に惱む様子ふりなど申分なく、主思ひのお初が尾上を慰むる芝居漸しの條もダレず、お初が「イヤほんに私としたことが龜相な、鹽谷殿に親御はありませぬもの」さつそくいなまは、きてん、だんちうしゆつしよく、ふみかんと、早速に言直す言葉の氣轉は段中の出色。文使

一 阿波鳴戸

絲 ○仙 ○龍

播重の姐さん、聲も節廻しも無難であつたが、お弓、親子の切ない刹那が、少々だれ氣味は惜しかつた。男ならぬこそ……。

二 合邦辻

絲 堀内花重 絲

お聲の優しい所から何となく品のよい語り振りで例の匙以外のお手際感じ入つたり。……休聲の爲でもあらうか、傍の婦人連曰く、先生ゑらう落ちやはりましたナア。

三 菅原寺子屋

絲 澁谷香坡 絲

一口に云ふと、澁谷翁の澁い淨瑠璃である。中々老練の所が多い。……病後の松王はチト苦しかつた。

四 赤垣出立

絲 千草紫紅 絲 同 上

聲達者に何の苦もなう、すら／＼と語られたはた

● 駄々評 田の字

先月八日夜、緒方病院の大廣間で、例の會があつた。幸に參聴の榮を得たから、駄々評を捏ねることに左の如し。

△絲の野澤一彌も神妙に勤めた。(まだある)

の條も言葉の外に佳く情を寫した。尾上の愁歎に移つては一層の語榮にであつた。今別れたが一生の別れ、とは知らずして、嘸やとつかは戻つて來て、歎かんことの不便やとから「アノ文をこらうじたら、何と身も世もあらうぞ、つねに氣細なかい様の、其場で直に死なしやんしよ」の邊は悲痛胸に迫つて、聴衆も大にハンカチを絞つたのである。要するに此一段は好成績、音色と音聲と兩方の研究を重ねつゝある、文樂座將來有望の青年であらう。拍手百雷の如き大喝采であつた。

女義太夫評判記

色眼鏡

播重席 竹本長廣(一)

長廣と云へば、日本女淨瑠璃の修行場と銘打つて、晝夜開場(年中無休)大繁昌、大阪名物の一に



廣長本竹

數へらるゝ千日前は、播重席の、總大將大立者である、呂昇と長廣は、大阪いな關西の女義太夫の

しかに清涼劑であつた。満場の聞手も皆さうであつたらしい、……が源藏の生酔本性違はぬ所、……端睨し得べからぬ所、……丹田に精氣充溢して居たかどうであつたか、此所一疑問であつた。

五 伊賀越沼津

緒方花溪 上

耳底に透徹る聲、……テツのない語り振、文句も空吞込で、よく重兵衛一類の性格まで會得せられた上だと、聴者も得心仕つたであらう。

六 おつま八郎兵衛鱸谷

絲 同 三 上木

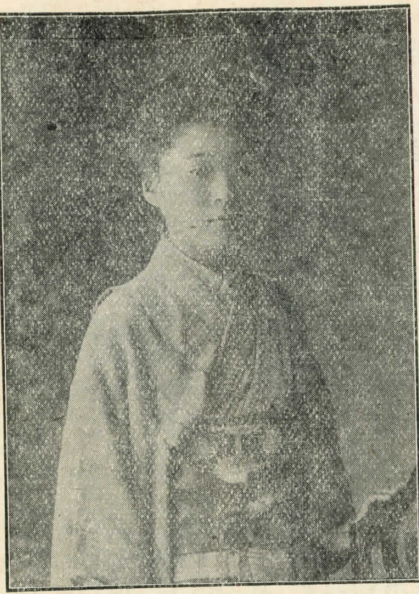
例の品のよい語り口、……天満の御大將と見奉つた。當夜のドツサリ、八郎兵衛の胸も張裂く無念の形相、……おつまの悲哀、……情あり、血あり……サスガにお手際といふべし、憾むらくは娘の假聲、……親の悲涙に調和せざりしやうなり。……

龍虎である彼女の生れは米の生る木を知らぬ備前の國は岡山で、九歳の年に先の吉兵衛の弟子豊澤勝三郎を師匠にして名を廣勝とつけて教はつたがそもく彼女が淨瑠璃界の仲間入りをした始めてある。然るに彼女は國元岡山では淨瑠璃會には度々出會したが、初舞臺は十五歳の年に大阪に来て日本橋北詰の澤の席で堀川を語つて所謂堂摺連を驚かしたが、始めである。それから十七歳に竹本長尾太夫の弟子に成つた。此の長尾太夫は稽古については至極く厳ましかつた。彼女も度々煙管の雁首が御見舞をしたさうだが、彼女は此處が大事件な處と、一心不亂に屈せず撓まず勉強をした効空しからず、彼女は十九歳の年(二十六年)に東京へ初めて上京た。其頃東京では先の綾之助が非常に人氣者だつたが、彼女は、陸派席で翌年五月まで(二十七年)満都を喧騒して其月末に歸阪した時には東京での大評判であつた事を涙を溢して喜んで談したそつだ。(東京の人氣者綾之助は彼女が上

京二ヶ月程して何處かへ行たさうだ。其後東京(度々)北海道、九州、各地方でも大人氣であつた。それから師匠の長尾太夫が亡なつてからは越路太夫(今の攝津大塚)の弟子となつて長廣と改名したのである。(其他各地方での彼女の艶罪其他の面白い事は澤山あるが、遺憾ながら原稿が非常に長くなるから次に載る)ラット忘れた、本名は多田おなつさんと云ふ優しい名だ。顔は瓜實で愛嬌がある。彼女の一笑は慥かに親や妻子を泣す力がある。(七八年前はなほさら)……彼女に淨瑠璃の所感を問ても、例の謙遜別に妾らの様なぶきような者は淨瑠璃のくふうなんか出来まますか、只御師匠さんから教なつた通りを語るばかりです、と云ふ風で、彼は藝人にめづらしい無口な感心な者だ。彼女の初めの弟子は廣勝(今はやめざる)である。今京都福眞亭で語る廣枝外二十と五六名(其内にやめたのが四五名)ある。……歳は五六に二三で、中年増盛りのほどの好き時だ。

同席 竹本小仙(二)

これも同じく播重席から出席する者だ。前記の長廣は中年増の總指令官……總大將……だが、小仙は同席の花形……正に開かんとす蕾の花の……若



(影采の歳三十) 仙小本竹

手の人氣者の賣り出し女だ。……臍の緒を切つたは當市は南地とやら、姓は岩井名はあさの、當年漸く二八の半開の花、體格がデカイからハイカラ巻にコツテリト厚化粧をして、見臺を前に控けた

は、玉を轉ばす石清水の如く、絃と和して、神に入る處六尺男子を三寸の喉に弄ぶかと思はれるが惜い事には聲が悪い、彼女も聲の悪いのは、非常に残念がつて居る。彼女の十八番は百度平や、菅原(僕は後を忘れた)お面は當世流行の丸顔にて別に取立る程ではないが、色白の婀娜な質、氣質は年が年故、非常に無邪氣だ、小仙ちゃん生れはと問へば日本、……意中の人はと問へば、知まへんとの中々の愛嬌者、只案じられるのは修業盛りを餘所にせぬ様に例の方は、こゝ八九年は出雲大社に延引てもらう様に、尙感心なのは彼は此後萬一何人からでも商賣をすゝめられても、決して他業はせず今のまゝ名もかへず、小仙の名で何處迄も打通して、竹本長廣の様に早く成たいとの意氣だ。其から近々より晝席を休んで、暫時裁縫學校に通うさうだ。

あまり、ほめ過ぎるかしらんが目下當席の若手の

姿は、何人の眼にも十と八九に見ゆる。彼女が五歳の時、宅の裏に素人淨瑠璃の稽古屋が有つた……彼(かれ)は裏の稽古所から日々に「今頃は半七さん」とか「去年の秋の病氣に」とか淨瑠璃文句を幼心に面白う、片言ながら眞似て居た、處があまり其眞似が旨いから稽古屋からも、すゝめられ、兩親も面白半分其師匠につかした。(其時は六歳)處が次第に好く語る様になつた。親もすきな道故、かはゆい一人娘だが、イツツ女義太夫にする氣になつて、十歳の年より豊澤捨三の門に入れた。が、彼女淨瑠璃稽古の中に尋常小學校へも入學し四年迄優等で卒業したとは感心だ。

彼女が、初席は十二歳の時(其年十月十五日)松屋町の支席に三勝酒屋を語り、各太夫及び見物連を驚かした。二日目(十六日)には、七つを語つた。(後より三つ)成程十歳より十六歳の當時迄、専心に稽古をしただけあつて、彼女が見臺を控つて、或は低く、或は高く、怒濤の巖に激するかと思へ

第一位を占て居る。今大阪で若手女義太夫番附を作らうものなら、三役は必ず請合の西瓜だ。……彼の好きな物は、山行と落語に、入道(入道は僕にはわからず)嗜好物ではおまんこ、洋食、サイダー、きらいな物は、遊船(海上)にお酒。

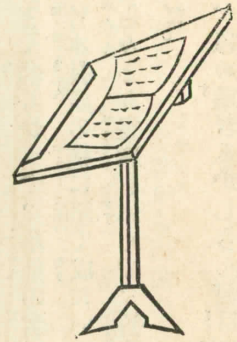
(竹本讀込)

色もかはらぬ粹なる竹に
野暮な雀が来て口説く
風に品よくなびいてゐれど
根本動かぬ糸やなぎ

(小仙讀込)

開きかゝりし二八の花を
誰か堂摺る事じやゝら
絃で惚させ文句で殺し
トロリとさすのは小仙嬢

次は……同席……豊竹小龍と……
……新町(義太夫)大西席……島子……



聲曲類集所載

古今文苑

●松の落葉 (一)

國性爺大明丸自序

近松門左衛門

昔榮花の公の大井川の逍遙には、管絃の船、和歌の船、文學の船をわかし、其藝にたへたる人を選び乗せられし、今此新艘に何をか積し、曰く竹本が一、流管絃あり、和歌あり、詩文あり、農

業あり、商賣あり、武士事の勇める、戀慕の相和らげる、人事のさかしおろかなる、佛神の權化、花鳥の色音、風聲水音、凡天の覆へる、地の載たる、漏る、方なき國性爺の唐船づくりをもこ船にして、拍子のこり楫、節のおも楫をこまやかにうつして、津々浦々に廻し、はてしなき國々、深山の奥の里々まで、到らしめんごてぞ、紫檀の棹、象牙の槳、三筋の纜にかけて、船乗よしの大吉日、順風に時を得たり、のせてやれ大明丸。

享保元年申の冬春ちかき日

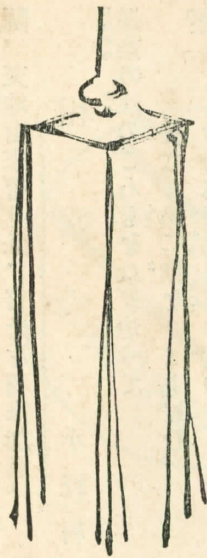
近松序之

秋の風



近松の秋

曾呂利新左衛門氏所藏並縮模



寫眞にまつてと考升た、右幅の入所さがし升に困難仕候……

漸々今朝入處知れ升たさいふこに御座候。

曾呂利

(記 者)

聯句 清國康熙帝

日月燈江海、油風雷鼓版、原天地一大戲場、堯舜
旦文武末走莽淨丑、古今來評多脚色。

詠巢林子

太田北山

以眞爲假々爲眞、生竹在胸泣鬼神、諷刺能回忠孝
明、懲勸頻世人因感、時別見說掉錫陷罪素非窺帝
闡、天地由來皆旦丑、吉光片羽筆加新。

和歌 小野利教

墨染の法のころもをぬぎかへて

綾なす筆に世をさとしけむ。

残れどもおもはで書し言の葉の

世々にのこりて猶句ふらむ。

狂歌

中村座にて仲直しける時 故 狂歌堂眞顔

是までのだんまりの慕引かへし

氣も相肩のものと棒組。

同じく 故 六樹園飯盛

膝とひざよい中村の下さじき

二間續きのへだてだに無

編者曰、二人は當時名聲相下らず甲は名を好み
て俗を厭はず、乙は學に誇りて高きに居るが故
に頗る不和なりき。飯盛飛彈匠物語を作れば、
眞顔亦、月露部物語を著す。されど作は飯盛
の方上手なりき。蜀山は眞顔の師にして、時の
先輩なれば常に之を憂ひ、その機會を待ちしに
折しも阪東三津五郎、岩井杜若の兩人、大不和
なりしを双方の最負連中よりすゝめて、中直り
整ひ、頃しも文化十四年春、中村座の顔見世狂
言に、「花の雪和合太平記」といふ大主題を掲げ
て、七年ぶりに一坐したり、蜀山好き機と、直
に芝居を見物し、夫となく兩人を呼寄せて、秀
佳、杜若の二人も斯の如く和睦して、水魚の中
となりしに、御邊等いつまで、難波の葦の角芽
立つぞ、角をり中よくなれと盃をさしけれ
ば、兩人多年の、怨をすて、右の歌よみかは
したりと云ふ。

近松門左衛門

竹本叶太夫

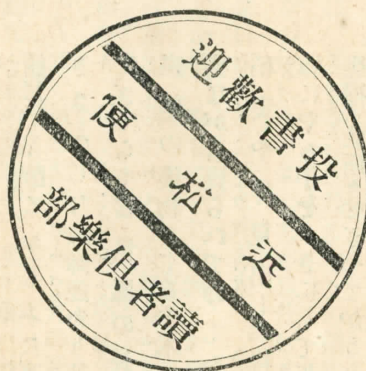
文章はたつと門左今の世に

感動させて人をなかくする。

近松會雜誌第一號諸名家の稿を讀みて

高知 始 童

掃寄せて見れば塵なし松の花



川柳

芝居には關係ないが三ツ四ツ但他人の作も

大阪 狂 柳

黒人と云はれる女色白し

お茶をひく藝者大方尻は白

大臣に尻をひつかける馬車の馬
おのが尻をおや／＼と子に托け
お氣がよいなど、立派に馬鹿にする
白瓜も臍をぬかれて雷になり

●狂詩

(作家不詳) 小笠原古澤寄

艷容女舞衣、(酒屋之段)

傾城有涙。作シ憂淵。湛得禍根。填トモレ填メ
義理堅ク依ニ宗岸ニ立チ。慈悲深ク以テ半兵衛一傳。縛リ
繩期スレ繋カント豚兒ノ命。覆水不レ還嫁女縁。天満ノ春
風吹ニ妬ミノ雨。盛ノ花將落シ淀川ノ邊。

播州皿屋敷、(鐵山館之場)

此ノ處ノ成リ行甚タ面沃。眼前ニ御皿一枚消ユ重テテ爲ニ
數取テ鐵山峙チ。算テ至ニ九枚ニ於菊淵。庭石苔飛テ
間牒現レ。井筒火燃テ怨靈招ケ。可シ憐妻女懸ニ人手ニ
年若ノ三平頓脱腰ヲ。

●鳥居香徑女史に答ふ

貴疑は早稻田大學刊行近松傑作全集第一篇を見ら
れたし。

忠臣藏俳句 (作者不詳)

阿部野 小笠原古潭

四季混題

- 初段 蟲干や御代にならべる星兜
- 二段目 待霄や松ヶ枝さるも明日のため
- 三段目 鮎だ／＼鯉とおもふた寒見舞
- 同裏 きさんじな夫婦連あり花の旅
- 四段目 夜ざくらや當世風の長羽織
- 五段目 鐵砲の獲物さぐるや木下闇
- 六段目 鳴ながら賣られてゆくや蟋蟀
- 七段目 稻妻や斧見出した椽の下
- 八段目 嫁にやる子をさきにして花野原
- 九段目 煤掃や此所をせぎつてかうせめて
- 十段目 ちさくとも男でぐんす菖蒲太刀
- 十二段目 衝突入りや足を大槌に數十人
- 十二段目 雪ふんで本望たりぬ富士詣
- 番外 炭部屋
- 雪晴や洗ひあげたる鮭の首

淵、深き妹春の二疋づれ、生れついたる数々の、
足手まどひのはかざらぬ、大椎峠、天柱の原、風
門が谷打渡り、いとかう／＼たるけんべきの、峨
々たる峯を餘所に見て、脊筋海道とば／＼と辿り
出るぞウザ／＼シ。
見上れば、遙の峯に生茂る木々の梢や、烏羽玉の
夜晝わかれ所にも、頭じらみは住むとかや、世上
の人の悪口に、花見風と浮名立つ、身のたのしみ
もいつしかに、昨日は今日の瀬とかはる、あすや
さつては崩出る草野にそよ風さへも、もしや知
死期の使かと、世を忍ぶ身の一筋に、千手の御手
につく／＼と、秋さたのみし七九の里、四くわ觀
音を打越で、鳥の虚寝や、帶の關、十四、十六、
初戀に、思ひ亂れし物心、血汐の酒の酔ひ紛れ、
縫目の絲のたまさに、綻び初めしころび寝の、
その睦言に云交し、取交したる誓紙の数々、かあ
い男と抱しめて、假令野の末、山の奥、虎臥野邊
の足の毛や、爪の地獄へ落るども、放れはせぬと

同 泉岳寺焼香諸家御預

死に臨む勇やのこして洗ひ鯉

狂歌募集

題 紙治、小春

撰者 岡田翠雨

右二題の内いづれを詠まるゝもよし
但一題首以内出詠の事

ノ切八月中

本誌第三卷を以て撰歌を發表す

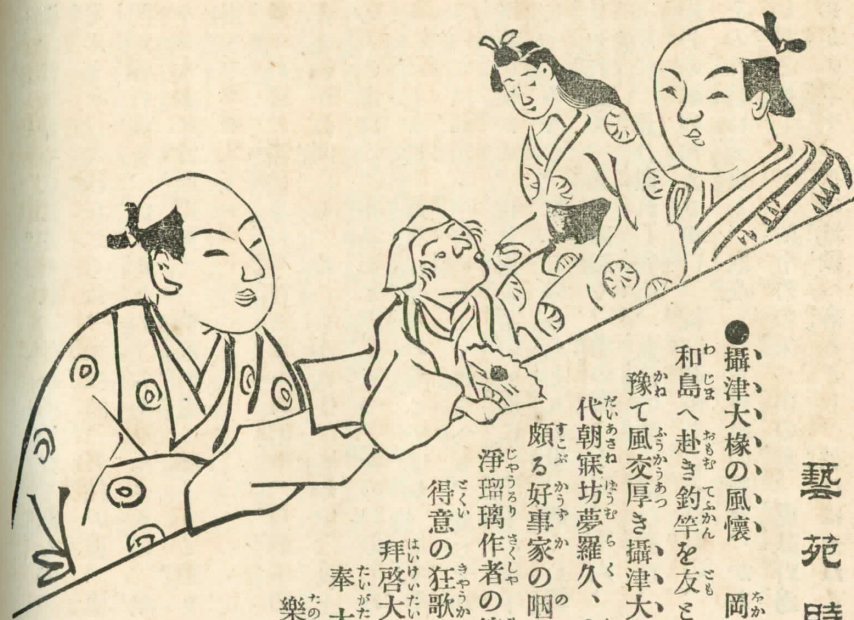
道行風の妹脊筋

(太夫爪本加久太夫直傳)

平賀源内

戀すてふ、我名はまだき立出る、襟の縫目や、肌
着のうち、馴し故郷をふり捨て、何國をあてど定
めなく、落ちて行身は人のみか、風の身にも戀の

いはしやんした、その言の葉がしみついて、妾が
脊の入はくろ、苦勞する身のうき旅も、ミンナわ
しから起つた事、こらへてやいのと寄添へば、男
も共に打萎れ、親の赦さぬ不義いたづら、襟の住
居も叶はねばかく、落ぶれし二人が中、心は矢竹
に憫れども、走らうにも、飛ばうにも、蚤ならぬ
身の悲しさど、そいろ涙にくれるが、ア、迷ふ
たり、誤つたり、實に數ならぬ此身にも、先祖の
ほまれ王猛が、傍若無人と名を傳へ、不思議を殘
す節穴に、恨を報いしためしもあり。又水中に浮
んでは、磁石にかはるの徳あれば、指に捻られ、
灰吹の底の藻屑と洗むども、屍に譽有明のつきぬ
妹春の旅づかれ、いざや急がん、夜明なば、東じ
らみと人やとがめん、兎にかくに、身の用心の腰
眼や、雲の懸梯、白妙の加賀越中の國境ふんごし
谷の片はとり、肛門寺とて名にしおふ、大師の古
跡伏をがみ、蟻のさわたり打すぎて、金だまの宿
にぞ三重着にける。



●攝津大様の風懷 岡田翠雨氏病ひ漸く懈りて、豫後保養の爲め暫く郷里宇和島へ赴き釣竿を友として江山に嘯かんとし、發程に臨み氏が襲藏の一幅を豫て風交厚き攝津大様に贈りき。此の幅は「白石斷」の作者烏亭焉馬、初代朝寢坊夢羅久、大窪詩佛等の狂歌又は繪畫を寄せがきたるものにて頗る好事家の咽喉を鳴らすべきものなり。攝翁は例の狂歌好きといひ淨瑠璃作者の筆蹟を得たる事とて、殊の外打喜び直ちに左の書面に得意の狂歌を記して之に報いたり。

拜啓大暑の候に候處日々御經過宜敷最早殆ど御全快の御様子奉 大賀候陳者今 回御攝養旁々歸縣被成候由渭濱釣竿の御樂しみ浦山敷存候、彌々御壯勝の上早々御登阪奉 待候小生も今日より須磨へ罷 越候 間御内片附候は一日なりとも御越は如何哉と存候昨日は豫て御咄しの珍幅御惠投被下難有早速拜見致候處至極面白き物にて相樂しみ吳々御禮奉 申上候不斗百人一首をおもひいで、

和田の原漕ぎ出て釣れば久方の

いたつき忘れ憂きをしら浪

御一笑

攝翁拜

七月二十二日

翠雨先生玉案下

●田中翁を悼む

本會發起人田中市兵衛翁は昨

秋以來糖尿病に罹り、京都河原町二條下る別邸にて静養中なりしが、炎暑の爲め病勢募りて、去月二十五日午後十時終に不歸の客となりぬ、享年七十有三、翁幼年より奮闘的に商事に努め、夙に關西實業界の元老たり。されば商工界に於ける功勞少なからず、老いて猶神戸棧橋會社社長、南海鐵道重役の外、七ヶ所に重役たりき。日露戰役中功に依り勳四等旭日小綬章を賜はりしが、今また病革まるや特旨を以て正六位に叙せられたり。翁常に淨瑠璃を好み、本會長土居氏と最も親善なり、今や本會發展に際し、斯人を喪ふ、まことに

痛惜に堪へず、茲に深く哀悼の意を表す。

●あゝ高木善兵衛氏 先に田中翁の死を吊し、

數日を出でずして高木氏の訃を聞く、あゝ何ぞそれ天の本會に 歿するや、吾人は熱誠なるこの二發起人を失ひ、轉た落實の感なくんばあらず。氏平生淨瑠璃を好み、頗る巧手なり。晩年業を見ず、悠々上の宮の別邸に於いて餘生を送り、斯道を樂まれしに一月以來中風症にかゝり専ら静養せられつゝありしが、俄に重態に陥り終に永眠せらる。享年六十五。氏といひ、田中翁といひ、本會の事業其緒に就くやつかざるに際し、忽然白玉樓中のひとなる。あゝ悲いかな。

●其後の紋十郎 京都繩手三條下る高樹院にて静療中の桐竹紋十郎は、下腹部の腫瘍は漸々臓器部に蔓延し、下腹部全體に疼痛を覺え、日夜苦悶甚だしく、去月二十日以來心臓にも故障を生じ、脈搏も不調にて、背部脚部に浮腫を來し、二十三

日來吃逆さへ出で、食事も牛乳一合、鶏卵二個、粥一合、葛湯少量を取るのみ。實に悲痛に堪へず。

(七月二十八日午前七時稿)

●越路太夫の一行 本月一日より京都四條南座にて文樂座連の素淨瑠璃興行、例の越路太夫の人氣に、同行の津太夫は改名の披露をもなす由にて、華洛鴨水のほどり、更に一味の清涼を得せしめつゝありと云ふ。

●公會堂の堀江藝妓淨瑠璃 大阪毎日新聞社主催の濱寺演遊會の餘興として、先月十五、十六、十七の三日間、午後七時より中の島公會堂にて催されたる堀江藝妓連の淨瑠璃會は、晝間の餘興に次いで、夕刻より納涼がてら詰めかくるもの多きが爲め、なか／＼の盛會なりき。當夜の番附は、

○菅原傳授手習鑑車曳の段松王丸(染吉)梅王丸(末三郎)櫻丸(駒鶴)杉王丸雜式(石子)時平公(梁之助)絲(若石)○無宿團七夏夜話岩井風呂の

般新に組織せられたる、喜睦會の第一回淨瑠璃大會を二十六、七の兩日に開催せられた。記者は幹事紙谷喜雀クンから聽問の榮を荷ふたが生憎、近松會創業發表の際とて、事務多忙の故を以て、往聽するを得なかつたは大に遺憾の極であつた。而して會員たる出演者諸クンの連名表は左の如くである。

(いろは順)

◎幹事

錦一 里鯉 大か 中ま 眞ね
笑軒 水光 朴言 梅砂

寶京月鳳松十聲玉木昇昇枝金鳳勝
一いろ呂梅白梅二保利鶯和叶興の

段茂兵衛(廣作)おとみ(駒二郎)治助(染吉)お梶(末三郎)佐兵衛(大助)久七(ごん八)絲(若石)○吉例曾我今日酒歡會對面の段十郎(六助)五郎(石子)虎御前(駒鶴)少將(駒二郎)小藤太(ごん八)八幡三郎(末三郎)朝比奈(廣作)祐經(梁之助)絲(若石)はやし(酒虎連中)

●播重翁建碑について 前號詳細に記したる播重翁の建碑は、全部竣工を告げ、不日除幕式を行ふよしなり。

因に云ふ、同席を他へ賣渡したりといふは全く誤聞にして、然も直之助翁が拮据經營今日の隆運を見るに至れる功は、決して當席主の忘れざる所にして、益々發展を期しつゝありとぞ。されば爰に附記して江湖に告ぐ。

◎喜睦會 (第二回の素義大會)

浪花名物の一として、花季都人士の杖を曳く彼の牡丹花を以て名ある、高津吉助邸園跡に於て、今

◎三味線

小玉 金鳳 喜雀 松若 松や 喜み 松若 金芳 松竹 松さ 仙松 仙仙 助造 鳳の 郎榮 彌郎 代

◎床世話

本天 豐本 重丸 已三

多太 鱗香 乃彌 八萬 分ゑ 相く 山金 貴魁 貴勇 松春 島章 島春 日美 日千 勢の
雀昇 安十 昇庄 蔵力 や生 昇昇 昇勢 樂竹 筵玉 辰大 喜鳳 出里 士

千秋樂萬歲

(七月二十九日吟翠報告)

●本誌に對する各新聞批評

△大阪毎日新聞

文豪近松葉林子の功績を發揚し其遺趾の保存維持を圖り兼て淨瑠璃道の奨励發達を以て目的とする爲に同好の士相集りて新に大阪の地に設立したる近松會の機關雜誌なり本誌には青々園、岡田翠雨、齋藤溪舟、木崎好尚、水谷不倒、坪内逍遙等諸名家の葉林子に關する考證記事談話等を掲載し内容整備材料豊富甚だ有興味的好誌なり

△大阪新報

我空前の大文豪近松葉林子の遺跡を保護し、併せてその著作に就いて前人の未だ手を着けない所を眞摯に研究しやうといふ目的で出來た近松會の機關雜誌で有る葉林子の過去の文壇に於ける功績後世の文學に及ぼした影響は今改めて説かずとも分つてゐやう。評者は葉林子と因縁の深い大阪の地で今迄何故此等の舉が盛んにならなかつたかを怪むてゐた位だ切に此の會の健全に發達せん事を祈る

△高知新聞

近松會は文豪近松葉林子が紀念の實を表彰し且つ近松を研究し以て將來の文學上に將に演劇上に新らしき生面を開き健全なる發展に資せんとする目的にて今回大阪市の斯道に關係ある人々之れが發起となり同地の實業家にして斯道に堪能の聞ある土居通夫氏を會長に推し緒方正清氏副會長に任じ同地五新聞記者評議員となり現在の名ある藝人作劇家劇評家文士の賛同を得て設立せるものにて本誌は其の初號とす内容は近松會雜誌の發刊に際し聊か近松を論じ更に藝林の諸子に及ぶ(緒方相山)冥途の

飛脚講義(青瑠璃漢)近松一中節(青々園)六代目染太夫自傳(岡田翠雨)松と俳諧(齋藤溪舟)其他葉林子及び藝界に關する記事あり近松を研究せん欲せば一本を備ふべし

△德島毎日新聞

葉林子の功績を發揚し其の遺趾の保存維持を圖り淨瑠璃道の奨励發達を以て目的とし大阪市の有志相謀りて本會を興し其の機關として發行せるもの本誌所載梅忠講義、近松一中節、近松の俳諧、日本の太史公等あり

△門司新報

英のセキスピア獨のロゲチルに優ることも劣らぬ我近松葉林子の研究は近頃漸く盛んとなり此世界的大文豪の作品を研究せざるものは以て文學藝術を口に筆にする能はざる勢なり曩に「近松傑作全集」の新釋出で(一部)其作物を紹介するあり而して茲に「近松會」が更に文豪紀念の實を表彰し近松研究を努めて以て文學と淨瑠璃との二者の發達に資せんとする吾人は此會の趣旨を賛し本誌の發刊を喜ぶものなり若し夫れ文學と淨瑠璃との研究に志あるものは亦之を賛し之が發達を希望するなるべし

△土陽新聞

英國のセキスピア獨乙のロゲチルにも比肩す可き葉林子近松門左衛門の作品を研究せん爲めに興れるもの近松會の雜誌の發刊に際し聊か近松を論じ更に藝林の諸子に及ぶ(緒方相山)梅川忠兵衛冥途の飛脚(青瑠璃)六代目染太夫自傳、近松と俳諧(齋藤溪舟)など讀む可きもの多し

△廣島藝備日日新聞

文豪葉林子近松門左衛門の文學に淨瑠璃に歌舞伎劇に其功績の

偉大なることは遍ねく世間の知る所なれども其作品に付ては眞偽の未だ確められざるものあれば今後益々之を研究すべき必要ありて今回浪華の有志者相謀り近松會なるものを創立したり本誌は實に其機關雜誌なり口繪には近松葉林子像及び贊の木版近松葉林子墓の寫眞版を掲げ本文は近松會記事、論說、講義、雜錄、古今文苑、藝界時報、會員の各欄に分ち材料豊富にして趣味多く近松門左衛門を研究せん欲する者に取ては購讀すべき良雜誌ならん

△弘前新聞

文豪近松葉林子の功績を發揚し其遺趾の保存維持を圖り兼て淨瑠璃道の奨励發達を以て目的とする近松會墳墓修繕、紀念碑建設、遺物蒐集、墳墓維持及例祭をする事になつて居る今回「近松會雜誌」と題する機關雜誌を發行せり表紙から何まで中々こつたもので口繪には葉林子像及贊(木版)葉林子墓(寫眞版)あり論說には緒方博士、鈴木學士の論文あり講義には梅忠の評釋、雜錄には伊原青々園、水谷不倒、坪内博士其他近松通の諸名士の執筆あり普通營利を目的とする巷間の雜誌と違ひ各自身錢切つての奮發だから近松に對すると同様の敬意を表して讀まされる一冊拾五錢毎月一回發刊次回からは漸次整頓更に大いに内容の充實に努むるさうだから近松の作つた其淨瑠璃を以て東北に撒りつゝある當市天狗諸君などは須らく双手を舉げて入會購讀せざる可らずだらう言ふ迄もなく葉林子近松門左衛門は殆んど英のシェイクスピアと獨のゲーテとを合して一丸とした程の大文豪

△丹洲時報

本月二十日を以て近松會雜誌の第一號が發刊せられた本誌の價値は今日においては未だ云爲するほどのものはない併し吾人は近松會なるものゝ趣旨に賛するものであるから其の機關誌の現はれた事を喜ぶのである向後は本誌に依つて近松會事業の經過が知らるゝと共に近松研究者に少なからぬ裨益を與へらるゝ事と信ずる攝津神崎の久々知廣濟寺内の葉林子墳墓が水谷不倒氏の浪花人士に取つては不覺と云はねばならぬ近松會と云ふ名稱の起りは去る四十年大朝の木崎好尚氏が同好文士を誘ふて廣濟寺に一日の雅遊を試みたに因る其後近松の舊蹟保存と云ふ事が喧くなつて四十二年六月近松翁墳墓の修築文庫の設立其他近松研究を標榜する近松會なるものゝ發會式が舉げられ土居通夫氏會長に緒方正清氏副會長に舉げられ大阪五新聞社の知名文士が評議員となり茲に組織的のものとなつたが爾來今日まで機關誌の發行を見なかつたのは一般會員に取つて何となく心本なく感ぜられた事であらうと思はれる浪花の土地に此種の會が今日までに起らなかつたと云ふが寧ろ迂濶で本會の如きは大阪を中心として大成せねばならぬもので吾人は本會の前途に多大の望を

屬し居るものである
 葉林子の研究價值如何は今更論する迄もないが、之れが研究は決して容易な事でない、頼ひにして本會には専門學者が後援に立つて居るから其の目的を達する事が出来やう初號誌上にも顔觸れは立派な方々が列んでゐる吾人は單に近松研究者の爲めに本會が最も眞面目のものであつて本誌が好個の伴侶たることを推薦するに止めて置く



●會員消息

(細大なく御通知を請ふ)

- 岡田評議員は病後静養の爲め一ヶ月の豫定を以て郷里宇和島へ歸省せらる
- 發起人竹本大隅太夫は美濃國多治見にて病を獲同地びいごろ屋別荘にて療養中の處漸次快方に向ひ此程歸阪目下加養中
- 發起人中村雁次郎丈は一座引連本月三日歸阪
- 發起人竹本攝津大椽は先月末より須磨に避暑
- 賛助員片岡太郎は別府溫泉に入浴

○發起人豊竹呂昇丈は韓國より來月上旬歸阪の筈

○發起人田中市兵衛翁は兼て病氣の處去月二十五日長逝せらる(別項時報欄記載)

○發起人高木善兵衛氏は豫て病氣の處本月五日死去せらる(別項記載)

○賛助員曾呂利新左衛門は十五日頃歸阪の豫定にて名古屋に行く

○賛助員竹本染太夫は目下福岡地方にて興行中

○賛助員竹本大島太夫鶴澤德治郎は目下清國大連にて興行中

○賛助員竹本春子太夫は目下九州にて興行中

○賛助員竹本伊達太夫同長子太夫野澤吉三郎は本月五日當地出發伊豫松山市新榮座へ乗込み七日開場十日間興行、同地打上後伊豫宇和島融通座にて七日間興行する由

○賛助員竹本越路太夫同津太夫は本月一日より京都市南座にて興行中

サギ香水



發行元 大阪備後町四 平山商店

流行新形



大阪市心橋南詰江東側

大阪電
大
電話
二二七

確正札



各種時計
貴金屬製品
安田源三朗
電話長東二三番

大坂市東區伏見町四丁目
時室堂

日本婦人の黒髪に且美ならしむる毛
髪油は何でしよー？
それは現今紳士淑女間に賞譽せられ
つゝある紀州○福のフヨー油であり
ます



油一ヨフ
大阪安堂寺二
店油 福村島

大販賣
特約店
心齋橋いづ勘 はかり賣も致升
大阪化粧品同盟會各店

證保驗膏郎史飼猪

商標

目キリ

録

大坂江戶阿波殿南詰
浪花藥館發

兩替商

●國庫債券
●各債證書
●勸業債券
●諸株券
●古金銀貨幣

右特別兌換信託御用印奉布候
大阪市東區平野町四丁目

竹原商店

電話
長東百〇四番
長東四百廿番
長東三百六番
東三六八九番

廣告

小野利教先生作歌 御影師範學校教諭米野鹿之助先生作曲

文部省 戊申 勸 儉 唱歌
檢定濟 大詔

袖珍美裝

定價一冊參錢五厘 郵稅壹錢

戊申の大詔に基づき、勤儉の意義を流麗婉雅、然も平易なる熟字にて作歌せられ、加ふるに遅速二種の快活なる曲譜を附せられたり。夙に檢定濟となる。小學校唱歌教材として洽く採用を得つゝあり。

大和田建樹先生校閱 小野利教先生作歌 田村虎藏先生作曲

帝國青年唱歌

四六版美製

一冊定價 五錢 郵稅 壹錢

本集收むる所、青年作業歌、同修學旅行歌、同總會式歌の三種、作歌の妙、作曲の巧、茲に贅せず。今や全國到る處青年會の設立あらざるなし。本書はそれらの提供物として、特に諸名家に請ふて作製したるものなり。請ふ弘く採用せられんことを。

發行所 大阪市北區東梅田町(大阪驛前)

盛文館

電話東一九七五話

振替貯 大阪七四三番
金口座 東京〇九三番

よき聲の出る新藥

本劑は一般この病を治し及日々發聲を事とする人の常用藥にして能くたんを祛りせきを治す故に美聲を望む人の一日も缺ぐべからざる靈藥なり

實驗證明 價箱入金壹圓、五拾錢、貳拾五錢、發入金拾錢

此度當市新町通伊藤泰山堂藥局より發賣せられたるよき聲の出る藥大音錠を試みましたが驚くべし服用後忽ちにして効ありて咽喉うるをいたんをきり聲をつかふに快活に發聲し得られ何程聲をつかふとも勞れず而も藥味頗る美にして服み易きは確に我等の實驗したるところなり從來より如此不思議なる聲の藥は絶て見たることなし故に大方の發聲家諸彦に此よき聲の出る藥大音錠を御紹介申上ます



竹本春子太夫
豐澤新左衛門

効能の確實なるは前記實驗證明の如し其他謡曲大家或は琵琶歌詩吟俳優、浪花節、常盤津、歌澤長歌等諸流の師匠又種々なる方面の發聲家より澤山賛辭を寄せられたり(省略)殊に發聲上に多大の關係を有する義太夫界諸彦幸に御愛用の光榮を賜らんことを乞ふ

本舖 大阪市西區新町三 伊藤泰山堂營業所

●諸公債
●諸株券 賣買

右勉強ト確實ヲ以テ取扱可申候間多少ニ不拘御注文希上候

大阪市西區阿波座中通一丁目

高木兩換店

電話西

三〇五〇番	三〇五一番	三〇五二番	三〇五三番	三〇五四番
-------	-------	-------	-------	-------

眞 寫

嚴暑之候尊堂益々御清
 穆の段奉賀候陳ば弊軒
 儀今般心齋橋北詰に新
 館を建築し去る七月一
 日より開業仕居候尤も
 諸機械共に新式のみを
 用ひ撮影可仕候間何卒
 船場獨立軒同様御引立
 賑々敷御來寫の程奉願
 上候先は右御案内迄如
 斯候 敬具

新 築
 心 齋 橋 獨 立 軒

(二二八一南話電)

詰北橋齋心阪大

船 場 獨 立 軒

目丁四町勞博阪大

良



キンチルトツビ



劑

胃

病

外内 諸新聞

誌雜

廣告 割引 確實 取扱所

大阪市西區靱南通一丁目(電車停留所西入)

開進社

電話西三五四番

●訂正第四版●

獨逸樞密醫官婦人科教授醫學博士ヘーガル先生原著
日本緒方婦人科病院院長醫學博士緒方正清先生譯述

社會的色慾論

全一冊 洋裝頗美本
正價金壹圓
郵稅金八錢

此書は現今婦人科學の泰斗たるヘーガル先生が多年の經驗に徴し色慾の原理を精密なる統計に基き社會に於ける色情の關係を生理學及び哲學上より論究しヘーガル氏等が社會と婦人に對する著書を論破したる者にして書中には交接の生理、男女色慾の比較、色情の健康と壽命とに對する社會的關係、婚嫁者と獨身者に於ける壽命の關係、房事と壽命、自殺者―狂者―淫慾亢進症―花風病、刑事學、房事に因する生殖器諸病、房事過度、野卑なる戀愛―強姦、房事と家族、夫婦間に兒なき者、色情に於ける國家の侵襲、生兒數と殖民地との關係、選兵と移住民、英國と佛國の狀態、國家生産と貿易の調節、殖民政略、ビーンショッフ氏の學說、房事と繁殖作用、子孫の性質、血族結婚、社會的血族、遺傳學說、結婚選擇等諸項を收め議論斬新精緻にして而かも文章平易なれば醫學者は勿論社會民政學者より一般士女に至るまで苟も生を此世に享たるものゝ必らず一讀すべき寶典なり

東京 大阪 京都 丸善株式會社

×一壘毛生液

是迄有觸たる毛生藥の類に非ず禿頭病○
脫毛病○はるぎは○まゆげ○髭○局部不
毛等發毛は五十日間脫毛者は三十日間を
限り奏効確實に必ず發毛する事を保證す

大瓶壹圓 大阪西區梅本町 大涉橋西詰南へ
小瓶五拾錢 島村 新
送料八錢 電話二八四六



伊藤の

煎藥七ふく入金拾貳錢
丸藥七ふく入金拾五錢

本劑は逆上を引下け胸の痞を開き大小便の
通じを快しひるしつ淋病五痔及胎毒を下す

本家 七ふくや 伊藤長兵衛

大阪市高津表門松屋町西入
振替大阪九七三番 電話南七二九

豐竹時太夫
竹本七五三太夫
竹本叶太夫
鶴澤寬治郎
鶴澤綱造
鶴澤鶴太郎

寄稿歡迎

- 一、近松翁遺品と其の所藏家
 - 二、各地斯道團體の狀況
 - 三、各地淨瑠璃會の景況及び批評
 - 四、地方天狗連の氏名年齡調及び得意の語物と其の世評
 - 五、演藝に關する所感様のもの
 - 六、市内各座及び各地に於ける劇評
 - 七、古今斯道家の逸話と傳記類（失敗談成功談共）
 - 八、古今演劇に關する詩、歌、俳句、狂歌、情歌、謎、一口話、考物等
 - 九、古今斯道家の著作物遺墨類
 - 十、斯道に關する珍談奇話並に端書使り
（面白く手みじかに書きたるもの）
 - 十一、淨瑠璃文句中の質疑
 - 十二、斯道家斯道上に因める寫眞類
 - 十三、其他古今ありとあらゆる事柄
- 右寄稿に對し價值あるものは相當の報酬を進呈す

明治四十三年七月十六日內務省許可
明治四十三年八月十日印刷
明治四十三年八月十二日發行

（每月一回）
十日發行

編輯兼
行人
和田次郎

大阪市北區中之島四丁目三十一番地

印刷人 辻 岩 雄

神戸市三之宮町一丁目三百二十番邸

印刷所
明輝社

神戸市三之宮町一丁目三百二十番邸

發行所 近松會事務所

大阪市北區中之島四丁目三十一番地

(電話西六二七番)

不許複製

定價

賣捌元

廣告料

注
意

一冊金拾五錢（郵券一割増但一錢切手に限る）
 ◎一ヶ年誌料金壹圓五拾錢を拂込まるゝ人に會員となし本誌無料配付（郵税不要）の上種々の特權あり
 大阪市北區東梅田町四十九番地
 （電車停留所側東エール）
 盛文館書店
 特別 壹頁 金貳拾圓 牛頁 金拾貳圓
 普通 同 金七圓 同 金四圓
 ◎本行五號活字計十二字詰但一頁二段） 金參拾錢
 ○本誌廣告料は割引なし
 本誌は全國到る處の書籍雜誌店に有り萬一書籍雜誌店に賣切の節は本會事務所に御注文を乞ふ
 本誌廣告御望の方へは御報次第事務員參上御承可仕候
 本誌廣告各切は毎月二日限り



近松會雅誌

第三編



第六

奥合

竹中村次郎
竹中村次郎
竹中村次郎
竹中村次郎
竹中村次郎
竹中村次郎
竹中村次郎
竹中村次郎
竹中村次郎
竹中村次郎

三味線

第十

竹中村次郎
竹中村次郎
竹中村次郎
竹中村次郎
竹中村次郎
竹中村次郎
竹中村次郎
竹中村次郎
竹中村次郎
竹中村次郎

上口 祥 日

竹中村次郎
竹中村次郎
竹中村次郎
竹中村次郎
竹中村次郎
竹中村次郎
竹中村次郎
竹中村次郎
竹中村次郎
竹中村次郎



大夫 近松門左衛門
座本 義太夫

傾城阿波鳴門

又切

竹中村次郎
竹中村次郎
竹中村次郎
竹中村次郎
竹中村次郎
竹中村次郎
竹中村次郎
竹中村次郎
竹中村次郎
竹中村次郎

第六

奥合

竹中村次郎
竹中村次郎
竹中村次郎
竹中村次郎
竹中村次郎
竹中村次郎
竹中村次郎
竹中村次郎
竹中村次郎
竹中村次郎